CINEMA RISE
No.52



エンジェル・ダスト
Angel Dust

天 使 に 会 っ た ら 、 天 使 を 殺 せ ！

PHOTOGRAPH : KAZUMI KURIGAMI

エンジェル・ダスト
Angel Dust

●目次●

2◉かいせつ
3◉ものがたり
6◉石井聰亙の「復活」／安井 豊
10◉両性具有者の夢／樋口泰人
12◉脱洗脳と転移／高橋紳吾
15◉石井聰亙の心理分析
16◉キャスト・プロフィール
21◉監督プロフィール／フィルモグラフィー
24◉スタッフ・プロフィール
25◉映画を食卓に連れて帰ろう
26◉ストレンジ・プラトニック・ラヴ・ストーリー／岡崎京子
30◉『エンジェル・ダスト』の10pieces(プロダクション・ノート)
33◉Behind the Subtitles／天野じゅねっと

1994年／日本映画／カラー／110分／35ミリ／1:1.66(ヨーロッパ・ビスタ)
アミューズビデオ＋ツインズ＋ユーロスペース提携作品 配給ユーロスペース

スタッフ
STAFF

監督:石井聰亙　Directed by SOGO ISHII
脚本:生田萬／石井聰亙　Written by YOROZU IKUTA／SOGO ISHII
撮影:笠松則通　Director of Photography：NORIMICHI KASAMATSU
照明:水野研一　Lighting by KENICHI MIZUNO
美術:丸尾知行　Production Designer：TOMOYUKI MARUO
音楽:長嶌寛幸(東京ダウザー)　Music by HIROYUKI NAGASHIMA
録音:菊池信之　Sound Editor：NOBUYUKI KIKUCHI
編集:松尾 浩／石井聰亙　Edited by HIROSHI MATSUO／SOGO ISHII
製作担当:鎌田賢一　Production Manager：KENICHI KAMATA
助監督:大原盛雄　Assistant Director：MORIO OHARA
製作:神野 智　Executive Producer：SATOSHI KANNO
プロデューサー:真木太郎　Producers：TARO MAKI,
泉 英次　EIJI IZUMI,
堀越謙三　KENZO HORIKOSHI
ライン・プロデューサー:下田淳行　Line Producer：ATSUYUKI SHIMODA
製作会社:株式会社ツインズ　Production：TWINS JAPAN INC.
製作協力:アミューズビデオ　In Associate with AMUSE VIDEO,
ユーロスペース　EURO SPACE INC.

キャスト
CAST

須磨節子:南 果歩　Setsuko Suma：KAHO MINAMI
阿久 礼:若松 武　Rei Aku：TAKESHI WAKAMATSU
須磨トモオ:豊川悦司　Tomoo Suma：ETSUSHI TOYOKAWA
武井ゆうき:滝沢涼子　Yuki Takei：RYOKO TAKIZAWA
番場二三男:塩野谷正幸　Fumio Banba：MASAYUKI SHIONOYA
島田孝太郎:近藤等則　Kotaro Shimada：TOSHINORI KONDO
芦田慎二:ユキオヤマト　Shinji Ashida：YUKIO YAMATO
左右田教授:秋山 仁　Professor Souda：JIN AKIYAMA
遠藤:田口トモロヲ　Endo：TOMOROWO TAGUCHI



か・い・せ・つ

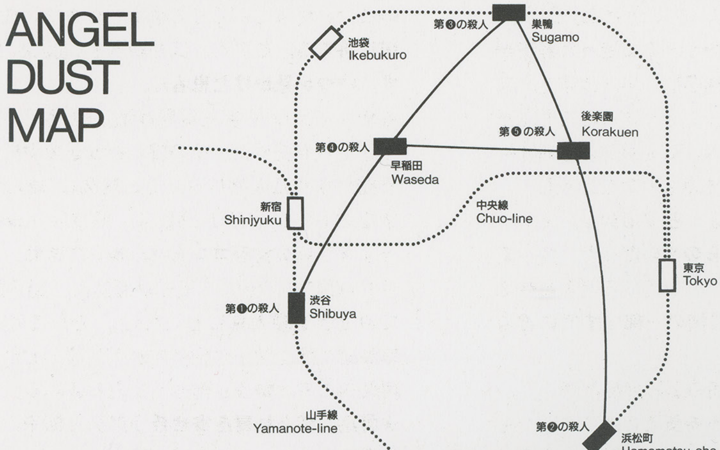
★石井聰亙が還ってきた。彼自身、そして観客が待ち望んでいた新作『エンジェル・ダスト』。1984年『逆噴射家族』以来、実に10年ぶりの劇場用長編映画になる。一昨年の秋から具体化したこの企画の脚本を共同で練りあげたのは劇団〝ブリキの自発団〟を主宰する生田萬。石井の持ち味である硬質さと生田のどこか温もりを感じさせる作風が溶け合って、日本版『羊たちの沈黙』ともいえる密度の濃いストーリーが生まれた。

★大都市、東京。衆目の中でおこる、若い女性ばかりを狙った連続殺人事件。解決のため起用されたのは美しい捜査官。事件の鍵を握るのは新興宗教に走った人間を荒っぽい心理療法でひきもどすことを仕事にしている逆(再?)洗脳士。ふたりはかつて同じ研究室に籍をおいた恋人同士でもあった。精神分析、デプログラミング、マインドコントロールなどを核として物語は展開するが、昨年あたりワイドショーを賑わせた話題を後追いするようなものではない。自分以外の何者かにコントロールされる脳というのは今までの石井作品にもしばしばみうけられるイメージ。それを今回はラブ・ストーリーにからめ、期待を裏切らない疾走感と、より柔軟になった語り口で映像化した。

★ヒロインの異常犯罪性格分析官――日本ではまだ存在していない職種だが最近ベストセラーとなった「FBI心理分析官」で書かれているのと同じ仕事内容。プロファイラーともいう――須磨節子を演じるのは南果歩。小栗康平監督作品『伽倻子のために』('84)で主役に抜擢されて以来、多方面でその魅力を開花させてきた。透明感ある声質を今回は低く抑え、新境地を開いている。その夫トモオには、『12人の優しい日本人』('91)『きらきらひかる』('92)などで独特の存在感が注目されている豊川悦司。逆洗脳士、阿久礼には寺山修司主宰の「天井棧敷」の看板役者として活躍後、数多くの舞台、テレビ、映画に参加している若松武。阿久の患者、ゆうきは'92年『青春デンデケデケデケ』でデビューした滝沢涼子が熱演する。ヒロインと共に捜査にあたる刑事には『病院で死ぬということ』の演技が記憶に新しい塩野谷正幸と、ニューヨークで修行を積んだユキオヤマト、その上司にトランペット奏者近藤等則、精神分析医には長髪の数学者としてお馴染みの秋山仁という異色キャスト。

★この作品のもうひとりの主人公は『東京』だ。まるで深海のように息苦しいこの大都市への愛憎を描きたい――それは石井の長い間の課題でもあった。'92年、WOWOWのJ・MOVIE・WARSで撮った短編のタイトルも『TOKYO BLOOD』だったように。その時も、そして今回も、制約が多く絵になりにくいこの街を実に魅力的にとらえてみせたのは、撮影の笠松則通。石井作品とは『狂い咲きサンダーロード』('80)からのつきあい。その後、阪本順治監督、松岡錠司監督作品やCMなどで活躍中の実力派キャメラマン。サスペンスの緩急を彩る、街のため息や月の鼓動のような音は東京ダウザーの長嶌寛幸。石井の短編作品でも音楽を担当し、フィルムに合わせたライブ活動も行っている。監督の強い希望で選ばれたテーマ曲「ふたりのシーズン／TIME OF THE SEASON」は60年代に次々とヒット曲を生み出したイギリス出身のゾンビーズの通算13枚目のシングル。1968年4月、全米で3位にまでなっている。

★『エンジェル・ダスト』は過剰な情報と物質に囲まれて、何が自分の本当の思考なのかを見極めにくくなった現代を呼吸している。愛情もまた、抱擁や優しい言葉のやりとりではなく「うつる」ほどに強い感情として存在する。脳に「移る」、あるいは身体に「伝染る」。そこに〝いま〟の愛の姿が「映って」いるサイコ・ラブ・サスペンス。それが『エンジェル・ダスト』なのだ。ちなみにタイトルとなった〝エンジェル・ダスト〟とは象の麻酔薬としても使われている世界最強のドラッグの名。その名のとおり、この映画はこまかい塵となってきっと観る者にも「うつる」はずだ。



も・の・が・た・り

★大都会、東京の月曜日、午後6時。混み合った山手線が渋谷のホームに滑り込んだその時、若い女性が崩れ落ちた。そして1週間後、やはり同じ月曜6時の山手線内、浜松町付近で同じ年頃の女性が殺される。死因はどちらも注射針のようなもので注入された毒。謎の連続殺人事件のはじまりだった。

★事件解決に起用されたのは科学警察研究所、異常犯罪性格分析官、須磨節子(南果歩)。外見は華奢だがその実績は警察でも一目おかれている。殺人課の部長、島田(近藤等則)、刑事の番場(塩野谷正幸)、芦田(ユキオヤマト)と組み、節子の犯人探しがはじまる。しかし次の月曜日、大量に動員された捜査員にもかかわらず、またしても衆目の中、第三の殺人が起こってしまった。

★第一被害者の朝日由美子だけが正面からではなく背中から刺されていることを重く見た節子は、由美子の家を訪ねる。人けのない、都会の死角の写真ばかりを撮っていた由美子の部屋。机の蔵書の一冊にはさまれていた写真に節子は目をとめる。写っていたのは〝リフリージング・サイコリュウム〟の精神科医、阿久礼(若松武)だった。由美子はかつて「絶対真理教団」というカルトの信者だったことがあり、家族が娘を取り戻すために逆洗脳を依頼したのが、阿久だった。

★阿久と節子はかつて同じ大学の精神医学研究室に籍を置き恋に落ちた過去がある。鋭すぎる頭脳と孤高の哲学ゆえアカデミックな世界から異端児あつかいされた阿久と、法医学界の権威、高原学部長の娘である節子のカップルは有名だった。やがて、ある連続殺人事件にまきこまれたことをきっかけに阿久は大学を追放されて海外へ。節子は研究室の同僚で、今は精神科医として病院に勤める須磨トモオ(豊川悦司)と結婚し家庭を築いていた。

★恋人同士だったころ、一緒にケービングをした洞窟入口で8年ぶりの再会を果たした二人。事件の被害者たちには必ず共通の鍵がある、と確信する節子は、かつて「どんな通り魔殺人も無差別ではない」と語っていた阿久に捜査への協力を請う。第一被害者は破壊的カルトに走った経験があり、第二被害者は一人暮らしの画学生、第三被害者は自閉症児の研究のために自ら半年も口をきかずに過ごしたセラピストの卵……三人に共通する強い孤立感、破滅感は阿久その人のものでもあり、節子自身のものでもあった。

★「絶対真理教団」で聞き込みをしようとする節子。そこへかかってきた緊急の電話は阿久からのものだった。すべてを見透かしたように節子の仕種まで言い当てる阿久が受話器のむこうでささやく。「犯人の感情の一部はすでに君の中にいた」と。

★そんな中、第四の被害者が早稲田の裏道で襲われる。山手線を離れて重ねられた犯行に焦りを覚える節子。いつも穏やかな愛情で節子の疲れを癒してくれる夫のトモオは「異様な事件だ。あせらない方がいい」と言ってはくれるのだが、節子が追い詰められているのはむしろ阿久との問題だった。彼の癖がうつり、気がつくと彼の頭文字を書いている……阿久が自分を浸食していくような感覚に怯える節子。

★偶然のきっかけから、節子は被害者たちが皆、あるパターンの色合いを身につけていたことに気がつく。健常な目にはそうと見えないが、後天性二種異常色覚という特殊なハンディを持つ、阿久にはそう映るはずの色合いだ。改めて犯行現場を調べてみると、そこにAの文字が浮かび上がる。Aを描く点だとしたら、次は後楽園か? 節子は犯人の目になって家路を急ぐ人の群れに目を走らす。その努力もむなしく結局は、目の前で五人目の被害者が倒れる。

★阿久をサイコリュウムにたずねて問いただすが「そんな妄想誰が信じる? 狂ってきたのは君の方だね」ととりあってはくれない。君を今でも愛している、と言う阿久に動揺する節子。

★彼女は次の月曜日6時、池袋の地下道に立つ。そこで阿久を見たのは気のせいだったのだろうか。緊張のあまり節子は倒れてしまう。結局その夜犯行はおこらなかった。

★ひとり家で休んでいた節子のもとにかかってくる電話。「なぜ私をつかまえにこない?」。車を走らせ阿久のもとへ出掛けていくが、その地下室には阿久を映し出すブラウン管が置かれているばかり。無人の逆洗脳室に閉じ込められ、阿久の掌の上で弄ばれて錯乱するが、そこへ阿久の患者が入ってきたのを機に節子は逃げ出した。

★家に戻った節子を迎えたのはトモオの死だった。節子は精神のバランスを失い入院する。「すべて阿久と私のせいだ。二人の関係が犠牲者たちを呼び寄せている」と言うばかりだ。初の男性被害者と思われたトモオがもともとアンドロギュノイド(両性具有者)であり、しかも去勢していたことが判明する。

★満月の夜、病院を抜け出した節子は、サイコリュウムで阿久と向かい合う。「これがあなたの愛なの? それとも私のせい?」阿久を刺そうとするがナイフは彼の肩をかすって床に落ちる。そこへ、武井ゆうき(滝沢涼子)が姿をあらわす。いつか見かけた患者だ。

★ゆうきは以前「絶対真理教団」の信者だったが阿久の強引な逆洗脳を受けた。その時、ゆうきの中に悦楽殺人狂という隠れされた人格を発見した阿久は〝蜂にさされたために手を放して母を死なせた〟というフィクションのトラウマをすりこみ彼女をコントロールしてきた。しかし、今、ゆうきは阿久に迫る。「先生は悪魔だ。逆洗脳するふりをしてゆうきを殺人鬼にしたんだ」。それでは真犯人は? 思わぬ展開に驚く節子に向けられた凶器。しかし、その毒針は阿久の力で、ゆうき自身へと向けられる。

★警察に囲まれ肩を寄せ合う阿久と節子。富士山が朝焼けに染まっていく。









石井聰亙の「復活」

安井 豊［やすい ゆたか／映画批評家］

自立した世界

◎私は'91年に、このパンフレットにも参加しているだろう樋口泰人とともに、アテネ・フランセで石井聰亙の特集上映を行なった。それは、初期8ミリ作品からCM、カラオケ・ビデオまで、これまでの石井の仕事をできるかぎり網羅したものだった。だが、石井の多様な仕事ぶりを紹介することに、この企画の意図があったわけではない。「石井聰亙復活祭」と題されたタイトルからも明らかなように、'84年の『逆噴射家族』以来、長編劇映画をつくれずにいた彼の「復活」を祝うことに、私たちの意図はあったのだ。いまだ企画段階であるにもかかわらず、いちはやくその「復活」を祝ってしまおうというのだから、当の本人にしてみれば迷惑な話であったろう。事実、「ゴッド・ストーン」と名づけられていたそのプロジェクトは、実現しなかったのである。しかし、私は、あの時点で「復活」を祝ったことに、間違いはなかったと思っている。「石井がいよいよ新作を撮るらしい」という噂は、それ以前にもいくどとなく聞いていた。また、その後にもいくつかのプロジェクトが、浮上しては消えていった。にもかかわらず、『狂い咲きサンダーロード』('80)から10年以上が経過した'91年のあの時点でこそ、石井の「復活」を祝福しなければならないと思ったのには、それなりの理由があったのだ。

◎石井は、つねに自立した世界を構成してきた。その世界は、私たちがふだん生活している時間や空間をいくら延長していったとしても見つけることのできない世界としてある。たとえば、『狂い咲きサンダーロード』の〈街(ストリート)〉や『爆裂都市』('82)〈都市(シティ)〉は、いつ存在していたのかもわからないし、どこに存在しているのかもわからない。それらは、誰もが経験的に知っている時代や地名に帰属してはいない。〈街〉は〈街〉として、〈都市〉は〈都市〉として、それ自体で自立しようとしているのだ。石井の映画において最もスリリングな瞬間は、そのどこにもないはずの世界が私たちの目のまえに出現するときであり、またその瞬間だけがリアルである。ところが私たちは、その自立した世界に、ふだん生活している世界を重ね合わせようとばかりしてはいなかっただろうか。もちろん、その自立した世界には、私たちと同じ人物が写っているし、聴いたことのある音楽も流れているだろう。ときには、ありふれた物語だって語られているかもしれない。だが、私たちは、そのような人物や、音楽や、物語といった、時代風俗として流行ったり、古びたりするものばかりに目を奪われて、石井固有のその世界を見そこなっていたのではないだろうか。私たちが石井の「復活」を望んだ理由のひとつは、そこにあった。時代風俗を気にする必要のなくなったいまだからこそ、石井によって構成されたその世界を、はっきりと見てとることができるだろうと考えたのである。

「アジア」の逆襲

◎映像と音響によって自立した世界を構成する石井の構成力は、この上もなく貴重なものである。映画づくりを庭づくりにたとえるのもおかしいが、日本の庭園づくりに借景という方法があることを知っているだろうか。庭をつくるときに、庭だけをつくるのではなく、その背後にある山や樹木などの自然の風景を借りてつくるのである。おそらく石井ならば、その借景を嫌い、庭を庭としてつくることだろう。ところが、私たちが見ている映画のほとんどは、その借景という方法を使うことによって成立しているようである。たとえば伊丹十三は、社会問題という「風景」を借りることによって映画をつくっている。「バブル経済」や「広域暴力団」など、きわめて日本的な社会問題という「風景」を背景として借りなければ、『マルサの女』('87)や『ミンボーの女』('92)という映画(庭)もないのである。したがって、私たちの関心は庭そのものにあるのではなく、次にどのような「風景」を背景として借りてくるのかということに集中することになるだろう。だとすると『逆噴射家族』('84)もまた、そのような借景的映画ではないだろうか。確かに一見すると、「住宅事情」や「受験戦

争」という日本的な「風景」を背景として借りなければ、あの庭付きの一戸建ての家もなかったかのように思われる。ところが逆説的なことに、あの一戸建ての家は、そのような「風景」を排除して、自立した家庭を実現するために建てられていたのである。いいかえれば、一戸建ての家にとって日本的「風景」とは、背景として調和しないばかりか、家そのものを破壊しかねない、白アリのような異物としてある。いずれにしてもあの〈家〉は、『狂い咲きサンダーロード』の〈街〉や、『爆裂都市』の〈都市〉と同じく、石井によって構成された自立した世界であることがわかるだろう。〈街〉や〈都市〉の場合、目に見えるものは細部に至るまで徹底的に構成されていたが、誰も全体像を把握することはできなかった。一方、一戸建ての家の場合は、最初から破壊される運命にあったのだ。形あるものとしては消滅してしまった〈家〉で、家族たちが生活するラスト・シーンこそは、石井の世界に最もふさわしいあり方である。

◎しかし、あのラスト・シーンは、ハッピー・エンドであるとともに、ある苦さを残すものであったこともまた事実だろう。「風景」を借りずに一戸建ての家をつくり、パーフェクトな家族を形成しようとする小林克也演じる父親の悲喜劇は、ある意味で、石井自身のアイロニカルな自画像でもあるからだ。興味深いことは、伊丹が借景的な映画をつくりはじめた時期と、石井が長編劇映画をつくれなくなった時期とが、ちょうど重なり合っていたことである。彼の長いブランクの原因の一端も、そのあたりにあるのかもしれない。日本では、映像と音響だけでひとつの世界をつくる石井のような構成力をもったタイプを、妄想型としてしりぞける傾向がある。たとえば、デンマークに住むラース・フォン・トリアーという映画作家もまた、そのひとりだろう。彼の長編デビュー作である『エレメント・オブ・クライム』('84)が日本で公開されたころ、石井ひとりが孤独にその作品を擁護していたことを、私はよく覚えている。そのトリアーの自立した世界は、本人によって「ヨーロッパ」と名づけられているが、石井の世界にはまだ名前がない。だが、そこにはすでに「アジア」という名が与えられているのではないだろうか。

私たちが石井の「復活」を望んだもうひとつの理由も、その「アジア」にかかわっている。なぜならば、日本庭園のようなあらゆる借景的映画に対する「アジア」の逆襲こそが、私たちの望んでいることにほかならないからである。

◎だが同時に、その「アジア」は、私たちが経験的に知っているアジアを指し示すわけではないことにも注意する必要がある。トリアーの「ヨーロッパ」も同じように、EC統合を目指すヨーロッパを指示してはいなかった。「アジア」も「ヨーロッパ」もともに、映像と音響だけでできている世界なのだ。その世界を構成するものも、その世界で構成されるものも、映像と音響、つまり映画である。たとえば、『アジアの逆襲』('83)がその典型としてあるだろう。つねにライブ・バージョンとして上映されるその映像は、石井によって二重化され、また音響は、東京ダウザーの長嶌によって多重化される。この映画はこれからも回を重ねるごとに、バージョン・アップ(自己増殖)をくり返すことになるだろう。(ごく最近、『爆裂都市』もまたこの回路に組み込まれたようだ。)

「撮れる人」から「撮る人」へ

◎さて、私はこれまでに石井の「復活」を望んだ理由をふたつ述べた。まず、石井によって構成された世界をはっきりと見たいということ。次に、その自立した世界による借景的映画への逆襲である。すでに明らかなように、このふたつの理由は、石井の世界への私たちの願望の投影である。その願望は、10年ぶりの新作が完成したことによって、つまり、石井の「復活」によって満たされた。もちろん欲望には限りがない。願望が満たされることは、さらに強い願望を生むことでもある。だが、第三の理由は、私たちの願望とは関係がない。それは石井自身と映画との関係に関することだ。石井と映画との関係に、以前とは異なるある変化が生じたのではないかという予感、その予感にもとづいて




MITSUKOSHI
トルコ航空
二十六日
月曜日
午後
GALLERY

私たちは「復活祭」を行った。そこで私たちが祝福した「復活」は、新作が完成することによって成就することになる「復活」とは、順序が逆になっている。石井はすでに「復活」していたからこそ、新作を完成することができたのだ。

◎では、石井と映画との間にどのような変化が生じたのか。それは、誰の目にも明らかなめざましい変化ではなく、きわめて小さな違いである。石井は「撮れる人」から「撮る人」へと変わったのである。「撮れる人」は、映画をつくる際にまず「撮れるだろうか」と考える。そこでは、自身の才能までも含んださまざま条件が問題とされるのである。一方「撮る人」は、たんに「撮れるだろう」と考えるだけである。石井は「復活祭」のチラシの短いエッセイで「なぜ映画を作るのか。解答はない。なぜなら問題もないからだ」といっている。もちろん、「撮る人」だからといって、経済的条件や技術的条件など、映画をつくる際のさまざまな条件が免除されるわけではない。しかし、「撮る人」にとって、それらの条件は「問題」ではなく、クリアーしなければならない実践的な課題なのである。「撮る人」にとっては、才能さえも、磨かなければならない実践的な技術のひとつなのだ。また、「撮れる人」と「撮る人」では、同じ「映画」であっても、まったく意味が違っている。「撮れる人」にとって、映画は自分の意志を実現するものである。一方「撮る人」にとって、映画は自由意志を超えたものである。石井は「何かの縁があったら、それは必ず自然に生まれるだろう」と書いている。彼のいう「自然」とは、借景として使われるような目に見える自然ではない。「自ら然らしむる」、あるいは「自ら成る」というような、目に見えない働きのことを意味している。だからといって、その「自然」を神秘的なものだと考える必要もまた、ない。それは、サッカーのプレイ中に、フィールド内に瞬間的に現われるオフサイド・ラインのようなものである。ディフェンス（守備）との関係によって現われたり消えたりするその見えないラインは、オフェンス（攻撃）側の意志ではどうにもならない。しかもそのラインを見ることができるのはフィールドの線上にいるラインズマン（審判）だけである。だとすると「撮る人」とは、フィールドの外にいて、ゲームを支配する監督（神）ではない。フィールド内で攻撃を組み立てる背番号10番（司令塔）であると同時に、フィールドの境界線上に位置するラインズマンでもあるような人をいうのである。いずれにしても、石井は映画を「自然」と考え、自ら「撮る人」となることによって「復活」し、『エンジェル・ダスト』を完成させたのであった。

〈心〉という新世界の入口

◎『エンジェル・ダスト』において石井は、人間の心という、またしてもどこに存在しているのかわからない世界を出現させた。『狂い咲きサンダーロード』で〈街〉を、『爆裂都市』で〈都市〉を、『逆噴射家族』で〈家〉を出現させた石井は『エンジェル・ダスト』で〈心〉という、最も身近なものでありながら最も神秘的な世界を出現させたのだ。その世界は「自然」を意識することによって、以前よりも強く、またしなやかである。その世界は、以前よりもましてロジカルに、かつシャープに構成されている。その世界の内部では、東京、山手線、富士山など、以前ならば排除したであろうものが、たんなる背景としてではなく、リアルなものとして機能している。その世界の内部では、連続殺人、逆洗脳、色覚異常、「ツァラトゥストラはかく語りき」、Aの文字、アイス・ピック、薔薇の刺、といった無数の事物が私たちの脳を刺激する。私たちはいま、富士山の樹海にぽっかりと開いた風穴の前に、つまり、〈心〉という世界の入口に立っている。私たちはごく自然に、「眠れぬ森の美女」とともにそこへ入って行くことができるだろう。

樋口泰人［ひぐち やすひと／映画評論家］

両性具有者の夢



◉『エンジェル・ダスト』の中で、主役である異常犯罪性格分析官の須磨節子の夫という重要な役割を背負って登場しながら、結局生きているうちは大したことをするわけでもなく、死んだ後になってようやくその存在の異様さと役割の重要性をアピールするという奇妙なキャラクターが、豊川悦司扮するトモオである。彼の異様さは、両性具有という肉体的特徴につきるのだが、それについての物語的な説明はいっさいない。私たちは彼の死後、まさにワイドショー的な興味を満足させられる形でしか、彼の両性具有について知ることはできない。その唐突さと与えられる情報量の少なさとが、彼の存在の異様さをさらに強めているのだが、しかしそのことによって異様な存在となったのは、トモオばかりではない。彼と夫婦として一緒に暮らしていた節子の異様さも、トモオの異様さによって照らし出されたのである。そのことに関しても、説明はいっさいない。私たちに与えられている情報は、トモオが「女性化」したということと、トモオと節子はすべてを納得して生活していたのだろうと言う彼らの恩師の発言くらいである。しかし彼らは一体何を納得していたというのか。一般的に考えるなら、二人が夫婦である以上、トモオは男性化するのが普通である（少なくとも現在の夫婦のあり方においては）。それに、スクリーンに映るトモオは、豊川悦司という男性の俳優が演じているし、外見上は女性というより男性に見える。トモオという名前も、少なくとも女性の名前ではない。ところがトモオは去勢し、女性化した。男性が女性化したのではなく、両性具有者が女性化したのだ。

◉男性が同性に性的関心を抱く場合、一般的にはゲイとかホモセクシャルとか、あるいはオカマとか呼ばれるが、彼らの生まれながらの肉体は男性である。つまり、先天的に、肉体的な性に規定されている。だから、「性からの解放」という言い方がされたり、「トランス・ジェンダー」というような考え方が生まれる。それは「解放」であり「トランス」ではあるが、結局肉体的な性に規定されざるを得ない世界の内部での出来事である。という言い方が悪ければ、彼らはどのような「性」を選び、あるいはどのように「性」から解放されても、現在における性的な意味ではあくまでも「健常者」である。もちろん彼らの中にも肉体的、精神的な障害者はいるだろうが、生まれながらに持っている肉体的な性はある。しかし、両性具有者の場合は、ほかの部分がいくら正常だとしても、生まれながらの性を肉体的に決めることはできない。つまり彼らは、生物学的に、「雄」「雌」と同列の存在として、つまり特異体質というのではなく、あくまでも通常の性の一つとして「両性具有」が認められない限り、性的な意味では、世界の外にい

るのだ。だから、トモオが男性として生きることも、女性として生きることも、あるいはどちらかを選んだ上で同性愛者として生きることも、それは性的な意味での偽装である。たとえあくまでも自然に、あるいは無意識のうちにそうなったとしても、彼は何かになることによって、はじめて世界の内に入ることができるのだから。

◉トモオの場合、恩師の話から判断すれば、トモオが女性化したのは明らかに節子とともに暮らしはじめてからのことであり、節子との関係の中でそうなったことが分かる。だから、トモオが女性化したのは、トモオの判断でもあり、節子の要求でもある。両性具有者であるトモオにとって、ある性を選ぶことが、突き詰めれば偽装でしかないとしたら、その性でなければならない彼の内的な理由はない。彼の判断は常に何かの反射である、ということになる。だから、ここでの二人の関係は、別々の人間としての関係ではなく、一人の人間(節子)と一枚の鏡(トモオ)の関係であるといえる。トモオが節子に対し、甲斐甲斐しく世話をするシーンは、トモオの女性化を示しているというよりも、二人の権力関係を示しているといった方がいいだろう。だから、女性化したトモオと暮らし、そのトモオを「愛している」という節子は、同性愛者ではなく、自己愛者である。トモオとの関係がさらに進んでいけば、節子は自らの自己愛の中に、完全に閉ざされてしまうだろう。

◉そんな節子とトモオの関係に、濃密に関わっているのが逆洗脳士である阿久礼であることは言うまでもない。この物語の中で彼だけが、鏡と向き合う節子の姿をわかっている。彼は節子との会話の中で、意識的に節子の自己愛についてふれ、彼女を刺激する。「君は欲しがってるだけなんだ。いまの君じゃ、相手は必ず破滅する」というような阿久礼のセリフは、節子の陥っている状況を見事についているといえる。その挑発を、節子をその自己愛から解放するための行為だと考えるなら、確かにその言葉どおり、阿久礼は節子の「ためなら、いつでも粉微塵になれる」と考えているとみていいだろう。「君には私が必要なんだ」という阿久礼のセリフは、彼の願望を現しているというよりも、単に決定的な事実を述べているのだとも考えられる。つまり阿久礼はある意味で徹底的に節子を理解している。電話口の向こう側から、その場での節子の行動に意見を言うことができるほどに。それは、彼が精神科医として節子の行動パターンを把握しているということ以上の、二人の関係を示している。極端なことを言ってしまえば、二人は同じ人間である。

◉例えば、二人が数年ぶりに再会する富士山の樹海でのシーン。ダイアモンド・ダストのような煌めく空気の中で、阿久の愛のイメージが語られる。「ほら、この空気の中に浮かぶ塵のように、自分を粉微塵にバラバラにして、頼りなく漂いながら、相手を求めるんだ、愛するように……解け合うんだ」。つまり、自分を自分として繋ぎ止めている何かから解き放たれて、自分が自分の細胞の一つ一つに戻ってしまうことでお互いに一体化するということである。二人がまだ大学にいた頃、二人は恋人同士だったというから、彼らはそのような状態を経験しているはずだ。つまり、彼らはいったんバラバラになり、解け合って一体化したものが、二つに分かれたものだということになる。阿久と節子は一つのものの二つの姿なのだ。彼らは細胞分裂によって生成した生物だということになる。つまり彼らには、生物学的な性別はなくなっていたと考えられる。別の言い方をすれば、二人とも両性具有者になっていたということになるだろうか。阿久はそのことを理解し、節子はそのことから逃げようとした。そして、自分はほかの誰でもなく自分であり、本来自分は「女」であるというアイデンティティの根拠を、両性具有であるトモオを女性化することに求めたのだといえる。

◉このように、節子をアイデンティティの危機に陥れた阿久の愛のイメージは、首都高速を走る車のヘッドライトやテールランプの光の流れをまるで血液の流れのようにとらえた『指圧王者』('89)の東京のイメージへとつながっていく。「この空気の中に浮かぶ塵のように、自分を粉微塵にバラバラにして、頼りなく漂う」ということは、自分と自分をとりまく空間とが一体化するということでもある。阿久がその愛のイメージを語ったとき、ダイアモンド・ダストのような煌めく空気に包まれた樹海は、阿久と一体化していたのだと言える。それと同じように、『指圧王者』で東京を身体のイメージでとらえた石井聰亙は、そのときやはり東京と一体化することを夢見ていたのだろう。愛によって細胞分裂を繰り返す都市東京。脈動し、呼吸する都市東京。人間はその血液細胞の一つ一つになって、その中を流れ、常に東京を活性化させていく。一人一人が東京の一部でもあり、東京そのものでもある。『エンジェル・ダスト』の中でも、東京の夜景が、異常なほどの明瞭さでとらえられている。そのテールランプや電光掲示の光の明瞭さこそが、細胞の輝きの明瞭さである。しかしそれは、あくまでも私たちである私たちにとって、非常に危険な輝きである。その天使の塵のようなくっきりと冴えた輝きの中に、私たちが私たちでなくなる契機が潜んでいるのだから。もちろんその先にあるのが、後天的両性具有者の夢見た世界であることは言うまでもない。

脱洗脳と転移

高橋紳吾［たかはし しんご／精神科医］

❖「阿久」がてがけているのはマインドコントロールや憑依など、宗教精神病理とか多重人格、変性意識といった精神医学でもいくぶん風変わりな研究領域だ。私の仕事とかなり共通するものがあって、親近感と同時に近親憎悪的感情が芽生えたりするのだが、それはさておいて、『エンジェル・ダスト』で多用されているテクニカル・タームに関して阿久にかわって補足説明を加えておきたい。

❖まず全体を流れる主題を分類すると、❶新宗教ないし破壊的カルトによるマインドコントロールと、それを解除するためのディプログラミング(脱洗脳ないし解体作業)、❷過剰なディプログラミングによりクライエントの精神の均衡がくずれ、ディプログラマー・阿久の人格が侵入し、操作不能になった潜在的なルストモルト(Lustmort：独語で悦楽殺人)による連続殺人、❸その事件をめぐって元恋人同士の間にくりひろげられるサイコバトルである。

❖❸についていえば、日本では今のところ「節子」のような異常犯罪性格分析官という職種は存在しない。最近邦訳されたFBI心理分析官*注のように米国では活躍の場のある専門家だが、日本では若干名の心理技官が科学警察で捜査協力をしているにすぎない。『エンジェル・ダスト』ではあたかも現代版の巫女のごとく神秘的性格を与えられた被暗示性の強い、若く繊細な女性として「節子」が登場し、南果歩がはまり役となっている。しかし、この現代の巫女はかつての師匠で、もっとパワーのあるカリスマ・阿久の前に翻弄され、精神が解体され、一緒に捜査陣もキリキリ舞いさせられる。

❖新興宗教教団に単身乗り込んだ節子に阿久から電話がかかり、汗ばんだ手を上着でぬぐう節子に、ハンカチでふけと指示するところなどは、元恋人の行動パターンを細かく記憶していた阿久の観察の鋭さがあらわれているが、サイコバトルとは頭脳戦争であって、あきらかに阿久が一枚上手ということになる。

❖ところで、ゆうきに潜んでいたルストモルトとは、簡単にいえば、殺人を犯すことによって著しく性的に興奮が嵩められる男たちがいて、そのために若い女性が被害にあうもので、いちおう異常性格の一型とされる臨床的には珍しい病気である。

❖映画では脱洗脳によってカルトによるマインドコントロールがはずれたついでに、ゆうきから阿久にたいして強い陽性転移(恋愛感情に似たもの)がおこり、阿久の色覚異常までもゆうきが取り込んでしまうという設定になっている。しかしこれは陽性転移をはるかに越えたFolie à deux(二人組精神病 病者の妄想が健常者に伝染し、二人で妄想を共有すること)の状態に近

く、阿久の狂気をとりこんでしまったことになる。したがってルストモルトはゆうきのものか、阿久のものか実際はっきりしないのである。このあたりを理解していないとこの映画の面白さは半減する。

❖ところで❶のマインドコントロールと脱洗脳の問題は、現代宗教事情のトピックスといってよいものだが、『エンジェル・ダスト』にあるような強烈な解体作業が精神科医の手でなされているという事実はない。ただし、一部の破壊的カルトではメンバーが抜けることを防止するために、「連れ戻されたら精神病院に入れられる」とか「そこでは脳を溶かす注射をされる」などと恐怖を植え続けているのも事実らしく、カルトと精神科医とは「敵対関係」にある場合が多い。

❖映画に出てきた新興宗教教団はあまり破壊カルト的な描写がされていないが、本物のカルトのもつ怖さは、本人が強制されたと気づかないうちに、ひそかに本人の思考や感情を操作し、カルトに都合のよいように人格が造りかえられ、本人のちからではそこから抜けることを心理的に困難にし、これまでの人間関係を絶たせるという点にある。一種の洗脳技法なのであるが、洗脳ほど強制されたという意識をもたないためにマインドコントロールという呼び方が一般的である。

❖そしてこのマインドコントロールから当人を救い出すには荒療治だが、拉致・監禁という手法がとられる。人身保護法に抵触するかもしれない行為であるが、家族がこれをおこない、専門家がアドバイスする形式をとるので、日本の警察も黙認しているのである。

❖カルトではメンバーが抜けないようにつねに目を光らせ、メンバーを霊感商法などの不法な資金集めなどの活動に不眠不休で従事させたり、新たにカルトメンバーを勧誘させるなどして集団への忠誠心を絶え間なく埋め込み続けるので、そういったマインドコントロールから自由にさせるために、どうしてもカルト側の言葉でいえば、拉致・監禁、家族および脱洗脳者側の言葉でいえば保護・救出という「隔離」が必要になる。カルトにとっては痛手なので、拉致されたら「抜けたふりをして帰ってこい」と事前に教育しており、「帰ってこなかったら地獄に堕ちる」などと繰り返して教え込んでいる。

❖最近ではあまり強制をしない救出カウンセリングという方法も色々試みられているが、実際の手法としてはそれほどかわりない。隔離しないで救出はありえないのである。

❖ところで米国では70年代に破壊的カルトの活動がすさまじくなり、その被害者が続出し、悲鳴をあげた家族のニーズに応じてプロフェッショナルな解体屋が登場することとなった。百万円単位の必要経費がかかるとか、解体屋が実は別のカルトや教団の人間で、そちらに引きこむために暗躍しているなどのうわさがたったりした。

❖いずれにしても脱洗脳をうけたものは、これまで信じていたものが一気に崩壊するので、その後しばらくは一種の空虚な心理状態へとおちこむ。アフターケアーがとても大切なのだ。これはアルコール依存症の治療で断酒したあと、放置するとしばしば自殺するほどのうつ状態におちこむのに似ていて、マインドコントロールが一種の脳内麻薬のような働きをしているからである。

❖このアフターケアの時のカウンセリングで、治療者対クライエントの関係は、教祖と信者の関係に似た構造となることがある。場合によっては阿久とゆうきのようなぬきさしならない関係になってしまうことがあったとしても不思議ではない。

❖精神科医の受ける初期トレーニングのうち重要なものの一つに転移の処理がある。軽度の陽性転移はむしろ治療促進のために望ましいことであるが、これが強烈になると、恋愛妄想にまで発展することがあって精神科医が患者から逃げ回るというはめになる。阿久はどうやらこの研修をまじめにやっていなかったとみえる。さらにその治療構造に目をそむけて「ハチのトラウマ」を刷りこんでしまうという二重の失敗をおかす。

❖刷りこみとは本来は生後すぐおこるもので、たとえば生まれたばかりのカモを人間が育てると、その人間を親と思い込んで、どこまでも後を追いつづけるという具合に条件づけられることを指している。もしかしたら催眠状態や脱洗脳の過程で、この刷りこみができるのではと考えたのが石井監督のアイデアである。しかし催眠によって獲得した刷りこみ（暗示や条件づけ）によって自己にとって著しく不利な行為、たとえば殺人や自殺を起こさせるということは不可能なので、結局このルストモルトは阿久の潜在意識がゆうきに転移したものと考察されるが、この辺りの詳しい事情は現在地検に起訴されている阿久先生に尋問してみるしかないであろう。

❖こんにち冷戦構造が消滅し、経済も低迷し、若者はなにを信じて生きればいいのか、なにを敵として闘えばいいのか判らない時代になった。こういう風潮を背景に都会では自己啓発セミナーや奇妙な宗教が今後ますます流行してくるだろう。そういう意味では映画という手法をとりながら、現代を覗く石井の視線は預言者のそれに近いのかもしれない。

＊注『FBI心理分析官――異常殺人者たちの素顔に迫る衝撃の手記』
ロバート・K・レスラー&トム・シャットマン　相原真理子訳（早川書房刊）


9.11.AM 9



石井聰亙の心理分析

分析／精神科医 高橋紳吾先生

●いろいろ書きかけの文章が並んでいます。それをみて、あなたの頭に浮かんできたことを、それに続けて書き、その文章を完成してください。

PART1

1 子供の頃、私は よく空想していたと思う。
2 私はよく人から という質問はよくわからない。
3 家の暮らし はもっと豊かになりたい。
4 私の失敗 ってどう説明したらいいかわからない。
5 家の人は私を どうでしょう?
6 私が得意になるのは どうでしょう?
7 争い エ、どういう意味?
8 私が知りたいことは 宇宙の真理(真実)
9 私の父は いい人
10 私がきらいなのは 甘えている奴
11 私の服 はもっと欲しい
12 死 は寿命でむかえたい
13 人々 っていろいろだね
14 私のできないことは たくさんある
15 運動 とは運を動かす事
16 将来 は計画的にいかなきゃね
17 もし私の母が ってどういう意味?
18 仕事 が充実しますように
19 私がひそかに ってなんだろう?
20 世の中 って何ですかね?
21 夫 私もその一員
22 時々私は なんだろう
23 私が心をひかれるのは いろんな事
24 私の不平は まあどうでしょう
25 私の兄弟(姉妹) には、妹がいるけど幸福になって欲しい。
26 職場では どうでしょう
27 私の顔 どうでしょう
28 今までは どうでしょうか
29 女 の子は今、元気でよい。
30 私が思い出すのは いろんな事

PART2

1 家では くつろぎたい
2 私を不安にするのは なんでしょう
3 友だち はすごく大切
4 私はよく どうするか?
5 もし私が って何でしょう?
6 私の母 は陽気です。
7 もう一度やり直せるなら どうしましょうか
8 男 はいばりすぎ
9 私の眠り はもう少し欲しい。
10 学校では どうだったんでしょう
11 恋愛 って……
12 もし私の父が レーサーだったら……
13 自殺 については一言では言い難い
14 私が好きなのは たくさんあるからねえ……
15 私の頭脳 がどうしたの?
16 金 はあった方がよい
17 私の野心 については語り難い
18 妻 よ、ありがとう
19 私の気持ち って言われても……
20 私の健康 はもっと大切にしたい
21 私が残念なのは なんでしょうか?
22 大部分の時間を 映画に費やしています
23 結婚 はvery good
24 調子のよい時 は気持ちよい
25 どうしても私は って思わない
26 家の人は ってどう答えたらいいか……
27 私が羨ましいのは 特にない
28 年をとった時 どうなんでしょうね
29 私が努力しているのは なんて言えるのでしょうか
30 私が忘れられないのは いろんな感動とエクスタシーの瞬間です

✤石井監督の心理分析をSCT(文章完成法)という投影法テストによって行った。撮影中で多忙なせいか、それとも氏の防衛が強いのか充分なデータがそろわず、60項目中で解答保留が24項目あったが、余興として解説しておく。(括弧内)は刺激語。

✤全般にめだった逸脱はないが、ユニークな解答としては「(運動)とは運を動かすこと」「(男)はいばりすぎ」「(女)の子は今、元気でよい」などで、仕事に対しては「(私の野心)については語り難い」けれども「(仕事)が充実しますように」とおもい、「(将来)は計画的にいかなきゃね」と希望しているが、「(職場)ではどうでしょう」と自己評価がいまひとつである。

✤自己の心理状態を分析することに不安があるのか、「(私の頭脳)がどうしたの?」とか「(自殺)については一言では言い難い」「(私の気持)って言われても……」とテストに抵抗を示すものの、生活は安定しているようで、「(結婚)はvery good」で「(妻)よ、ありがとう」の状態だし、過去についても「(私の母)は陽気です」「(私の父)はいい人」と恵まれていたことを示す。そのような環境下で「(子供の頃、私は)よく空想していたと思う」と述べ、「(私が知りたいことは)宇宙の真理」であるとの観念的な傾向を持っている。自己を律するのに「(私がきらいなのは)甘えている奴」という基準をとるが、自他関係では「(友だち)はすごく大切」という具合にバランスは良好である。

✤テストからは、他者への関心の度合いは高いが、自己イメージはまだ確立途上にあり、「(私が努力しているのは)なんて言えるのでしょうか」と、少年のような求道者像が浮かび上がるのである。

キャスト・プロフィール

南 果歩
Kaho Minami

【須磨節子】

◇強さと脆さをあわせもったヒロイン、須磨節子。微妙な表情を全シーンで厳しく要求される役柄だが、「〝これが最後かもしれない〞、そんな気持ちで役にのめり込んでいく」という南果歩が監督の期待にこたえて奮闘。女優生活10年目を迎えた南にとって、節子役は新たな出発点となった。

◇1964年兵庫県生まれ。桐朋学園短大演劇科卒。小栗康平監督『伽倻子のために』の主役公募に応募、2,200人の中から選ばれる。TBSのテレビ小説「五度半さん」のヒロインとしてテレビにも出演。坂東玉三郎の初演出舞台「ロミオとジュリエット」('86年)で初舞台。以後映画、テレビ、舞台で活躍中。

映画:『伽倻子のために』('84)『漂流教室』('87)『せんせい』('89)『蛍』('89)『帝都大戦』('89)『さよなら、こんにちわ』('90)『クレープ』('93)

TV:「五度半さん」('85)「他人の家」('89)「ウルトラマンをつくった男たち」('89)「清左衛門 残日録」('93)「嘘つきは夫婦のはじまり」('93)「彼と彼女の事情」('94)



若松 武
Takeshi Wakamatsu

【阿久 礼】

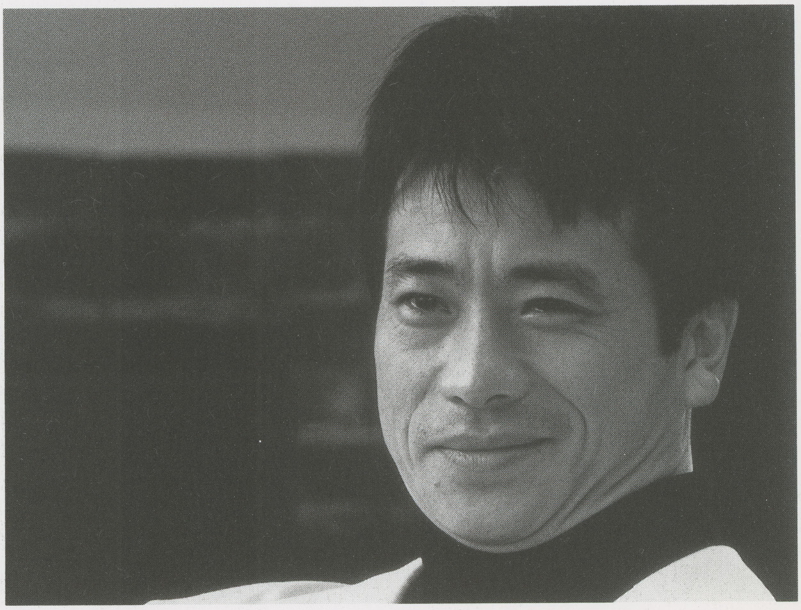
◇すべてを見透かすような視線で獲物を射止める逆洗脳士。この役にはこの人しかいない、と監督たっての希望によるキャスティング。鍛え上げた肉体で、舞台を自在に動き回るタイプの役者である若松に、監督はあえて静的な演技を要求した。内へこめられたパワーが怪人〝阿久礼〞の凄味となっている。

◇1950年東京都生まれ。日大芸術学部在学中に劇団「転倒虫」を主宰。その後、寺山修司の演劇実験室「天井桟敷」で日本のみならず、海外でも精力的に活動する。1988年に公演した「パラダイス・ロスト」で'88年度文化庁優秀舞台奨励賞を受賞。「天井桟敷」解散後は、前衛演劇だけでなく、テレビ・ドラマやミュージカル、映画など多方面に活躍している。

映画:『ボクサー』('77)『草迷宮』('79)『サード』('78)『上海異人娼館』('81)『さらば箱舟』('84)

TV:「武田信玄」('88)「新十津川物語」('92)

舞台:「中国の不思議な役人」('77)「毛皮のマリー」('83)「マダム貞奴」('84)「テンペスト」('87)［'88年イギリス・エジンバラ演劇祭参加作品］「NINAGAWA・マクベス」('87)「きらら浮世伝」('88)「イカれた主婦」('88～'90)「パラダイス・ロスト」('88)「恋歴・藤のおもかげ」('89)「白髭のリア」('89)「お気に召すまま」('90)「阿OKUNI国」('90～'92)「イカれた主婦2」('91)「から騒ぎ」('91)「桜の森の満開の下」('92)「夏の夜の夢」('94)「そして誰もいなくなった」('94)「火の鳥」('94年10月日生劇場にて公演予定)



豊川悦司
Etsushi Toyokawa

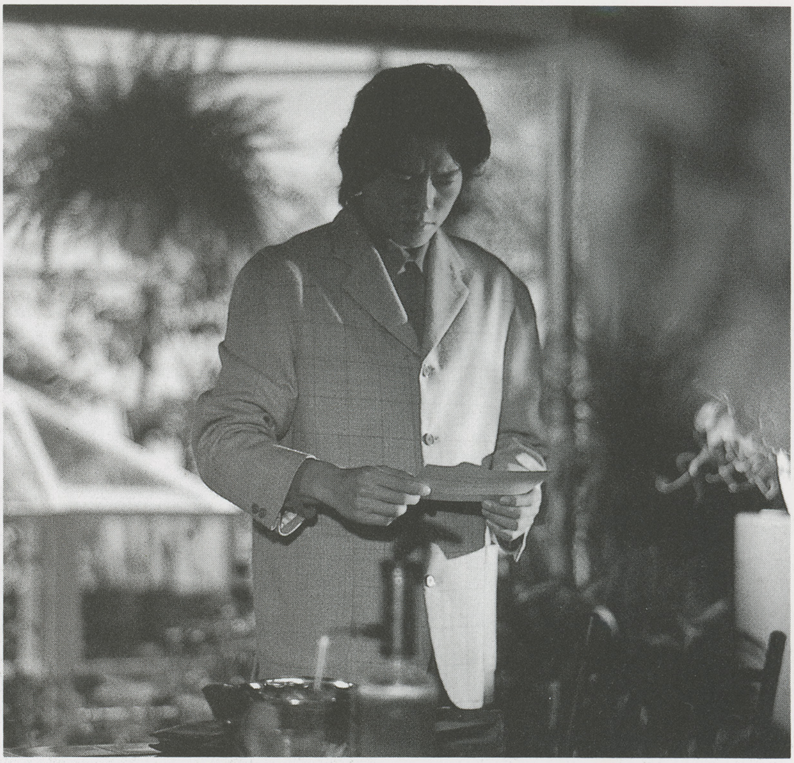
【須磨トモオ】

◆『きらきらひかる』『課長 島耕作』でホモセクシャルを演じた豊川は、今回も複雑な"性"を表現しなければならなかったが、石井聰亙作品ということで出演を快諾。監督も「僕らの時代の俳優が現れたって感じがした。これでまた映画が楽しくなるよ」とトモオ像に満足している。

◆1962年大阪府生まれ。関西学院大学中退後、劇団「3○○(さんじゅうまる)」に参加。'89年に退団後、映画、舞台、テレビで活躍中。

映画:『3−4×10月』('90)『12人の優しい日本人』('91)『きらきらひかる』('92)『課長 島耕作』('92)『居酒屋ゆうれい』('94)『NIGHT HEAD』('94年11月公開予定)

TV:「いとこ同志」('92)「NIGHT HEAD」('92〜'93)「炎立つ」('93)「この世の果て」('94)「この愛に生きて」('94)



滝沢涼子
Ryoko Takizawa

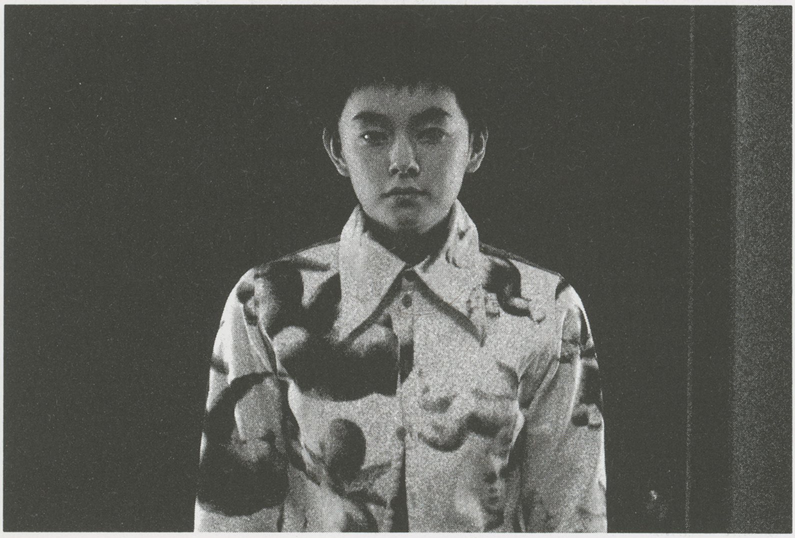
【武井ゆうき】

◆物語の重要な鍵を握る武井ゆうき役に抜擢されたのは、プロデューサーが監督に引き合わせた新人、滝沢涼子。監督いわく「本当に人を殺しそうだった」というほどの集中力がクライマックスを引き立てている。

◆1969年神奈川県生まれ。美容学校を卒業後、プロの美容師として約4年ほど勤めていたところ、街でスカウトされたのをきっかけに渋谷メディアワークショップのオーディションを受け、入所。卒業後、東京乾電池オフィスに所属。大林宣彦監督の『青春デンデケデケデケ』でデビュー。

映画:『青春デンデケデケデケ』('92)『乳房』('93)

TV:「谷口六三商店」('93)「彼女の嫌いな彼女」('93)「シチリアの龍舌蘭」('94)「遠山金志郎美容室」('94)「バック・トゥ・ザ・ギャートルズ」('94)



塩野谷正幸
Masayuki Shionoya

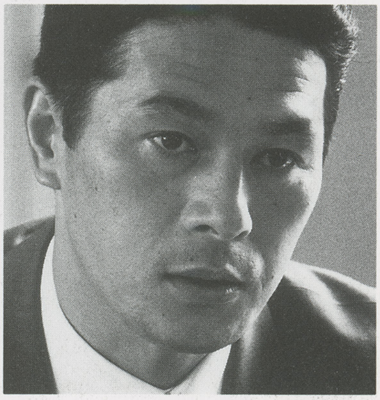
【番場二三男】

◆1953年新潟県生まれ。'73年に流山児祥主宰の演劇団に入り、舞台俳優としての経験を重ねたのち、現在では、テレビや映画に活躍をしている。

映画:『MISHIMA』('84)『瀬戸内少年野球団』('84)『赤と黒の熱情 Passion』('92)『おこげ—OKOGE』('92)『病院で死ぬということ』('93)[高崎映画祭助演男優賞受賞]

TV:「翔ぶが如く」('90)「腕におぼえあり」('92)「炎立つ」('93)「雪」('94)「病床六尺、正岡子規」('94年 NHKスペシャルにて放映)

舞台:「マクベス」('90)「ピカレスク イヤーゴ」('91)「砂の上のサンバ」('93)「背信」('93)「悪漢リチャード」('94)



近藤等則
Toshinori Kondo

【島田孝太郎】

◇1948年愛媛県生まれ。京都大学卒業後、上京しフリージャズ奏者として活躍。1978年に単身ニューヨークへ移り住み、そこで出会ったビル・ラズウェルらとグループを結成。その一方でヨーロッパへも進出し、フリージャズからフリー・インプロビゼーション(即興ジャス)へとスタイルを変えていく。この間にリリースしたアルバムは、アメリカとヨーロッパを合わせて20枚以上もの数となった。1980年に日本に戻り再び演奏活動を開始。1986年にはヨーロッパ23カ所でツアーを成功させ、日本を代表するジャズ・トランペット奏者としての地位を獲得する。その後自らスタジオを開設。主なアルバムは「空中浮遊」('83)「大変」('84)「コントン」('86)「337」('87)「HUMAN MARKET」('88)など多数あり、'93年の2月には初のソロ・アルバム「TOUCH STONE」をリリース。また、今年の5月に奈良の東大寺で開催されたイベント「GME'94」では、見事な演奏を繰り広げた。

映画：『郷愁』('88)［音楽担当のみ］『てなもんやコネクション』('90)［音楽、出演］『首領を殺った男』('94)［音楽担当のみ］

TV：「プレステージ」('89)「MEGUMI」('89)

TV音楽：「土曜フォーラム」('90)「クレジット・カード」('90)「昼どき日本列島」('91)「恋しとよ君恋しとよ」('91)「人間到る処青山あり」('91)「空間道楽」('90～'92)

CM：資生堂「アウスレーゼ」「JCBカード」アサヒビール「スーパードライ」

ラジオ：「795ミッドナイトスペシャル」('90)



ユキオヤマト
Yukio Yamato

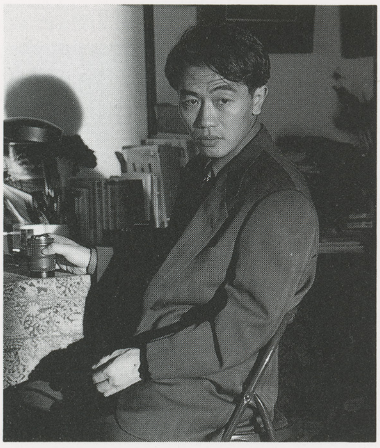
【芦田慎二】

◇1957年富山県生まれ。ニューヨークに10年在住し、アクターズスタジオで本格的に演技の勉強をする。ポール・モリッシィ監督作品『FORTY DEUCE』('82)でスクリーンデビューを果たし、マイケル・チミノ監督作品の『イヤー・オブ・ザ・ドラゴン』やモリッシィ監督の次作『MIXED BLOOD』('85)に出演するなど海外で活躍。日本映画界には『二十世紀少年読本』でデビューした。

映画：『イヤー・オブ・ザ・ドラゴン』('85)『二十世紀少年読本』('89)『ジパング』('90)『チャイナシャドー』('90)『アイ・ラブ・ニッポン』('91)『眠らない街・新宿鮫』('93)

TV：「並木家の人々」('93)「花の乱」('94)

舞台：「ロレン・ザッチョ」('93)





秋山　仁
Jin Akiyama

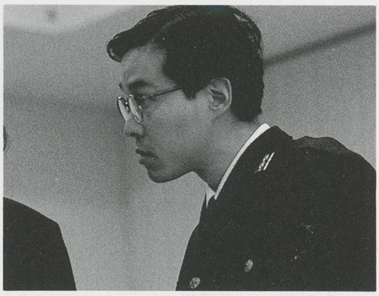
【左右田教授】

◇1946年東京都生まれ。1990年に日本が初出場した第31回国際数学オリンピック(IMO)で試験問題を選考する国際陪審員に抜擢された理学博士。東海大学教育研究所教授。20代後半にミシガン大学数学科に留学。本場で過酷な研究の修羅場をくぐりぬけ、鋭い感性と発想力による百数十に及ぶ定理を専門誌に発表。その後、欧文、邦文による専門書、啓蒙書30余冊を著す。また、様々な教育番組に出演し、数学を通して学ぶことの楽しさを教えている。

著書：「グラフ論要説」('82/槙書店)「入門組合せ論」('85/共立出版)「秋山仁の数学渡世」('93/朝日新聞社)「秋山仁の"落ちこぼれは天才だア"」吉永良正著('93/講談社)「皆殺しの数学」('94/KKベストセラーズ)「努力は報われず正義は滅びる」('94/同文書院)その他多数。

TV：「おしえて！ガリレオ」('93)「ファイト」('93)「数学大好き」('94)「秋山仁の算数ぎらい大集合」('94年夏休みのみ放映)

ラジオ：「お早う中年探偵団」('94)



田口トモロヲ
Tomorowo Taguchi

【遠藤】

◇1957年東京都生まれ。演劇集団「発見の会」に参加以来、［ラジカル・ガジベリビンバ・システム］［WAHAHA本舗］［劇団健康］などの舞台に客演する。塚本晋也監督作品『普通サイズの怪人』にも出演。以後"塚本ワールド"を形成する最も重要な役者となる。テレビ、映画、ラジオと広範囲にわたってエンターティナーとしての才能を印象づけている。並行して、バンド「ばちかぶり」で音楽活動も展開。'92年10月にアルバム「Vachicalist」をリリースし、ソロ・デビューを果たした。最近ではWOWOW 衛星放送オリジナル・ドラマ『ゲーム・ザ・ヘブン』('93)での探偵役が記憶に新しい。

映画：『普通サイズの怪人』('89)『鉄男』('89)『さわこの恋』('90)『鉄男II』('92)『姐 極道を愛した女・桐子』('93)『夢魔』('94)

Vシネマ：「魔王街 サディスティックシティ」('93)「ブラックマネー」('94年12月発売予定)

その他の曲者、芸達者たち

【犯人を引き寄せる5人の被害者】

◇自己破滅的感情を持った若い女性という、まったく台詞のない役柄を視線や後ろ姿だけで演じ抜いたのは、写真選考を通過した40〜50名の中からさらに厳選された5人。今後の活躍が待ち遠しい前途有望な女優陣だ。

◇第一被害者、朝日由美子役を演じたのは、Vシネマ『丹波哲郎の大逆転』(’90)でデビューした、目下、売出し中の菊地彩。最近では、NHKの連続ドラマシリーズ「腕におぼえあり」(’93)や「ひらり」(’93)に出演している。



◇第二被害者、画学生の高木まゆみを演じた野木愛は、今回が初めての映画出演となった横浜国立大学の3年生。小学生の時から英語教室主催の舞台を中心に演劇を勉強。今後は大学に通いながら、本格的に演技の勉強を重ね、プロとして活躍したいと考えている。



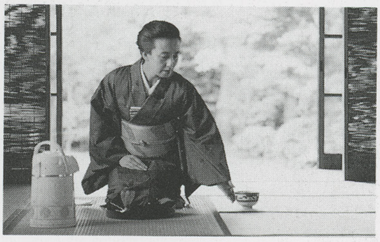
◇自閉症児の研究のため半年間誰とも口を効かないセラピストの卵、第三被害者の小田原和子役にはモデルの経験を経て、「ファミリーマート」などのテレビ・コマーシャルや大映Vシネマ「なんぼのもんじゃい2」(’94)で活躍している鈴木佐和子が扮している。

◇コインランドリーで殺害される第四被害者、道草伊代役を演じた新井亜樹は、デザイナーとしての仕事をしながら[大人計画]の舞台をこなしているアクティブな女優。

◇赤いワンピースを来た第五被害者、飯尾弘美を演じたのは、舞台女優の高仁和枝。彼女は 2年半[蜷川カンパニー]に籍を置き、昨年の秋からフリーとなった。今後は舞台だけではなく、映像の分野にも活躍の場を広げようと演技に磨きをかけている。現在、舞台「Blood Sucker」に出演中。

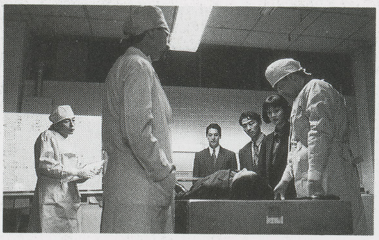
【第一被害者、朝日由美子の母】

◇品格のある、由緒正しい家系をしっかりと守る母親役を演じたのは、[ブリキの自発団]の看板女優で、この映画の脚本を書いた生田萬のパートナーでもある、銀粉蝶。ワン・シーンの出演ではあるが、手抜きのない演技に見るものを引き込んでしまう。



【3人の検死官】

◇白衣に身を包み、手早く死体の処理をする検死官助手としてスクリーンに登場したのは、実際に検死、法医学解剖を行っている杏林大学医学部教授、佐藤喜宣先生。先生の協力のもと大学内の死体霊安解剖室で撮影されたこのシーンは、プロの手際の良さから臨場感溢れるものとなった。

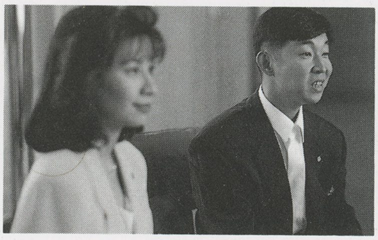


◇もう一人の長髪の検死官助手を演じたのは、ミュージシャンのLAPIS。6年程前、当時結成していたFRICTIONのライブ・ビデオ「DUMB NUMB LIVE FRICTON」(’86)を監督が手掛けた縁で今回の出演となった。スクリーンの彼はステージでのパワフルな活動に劣らない、強烈な存在感を放っている。

◇死体は見慣れたものといった最も検死官らしい表情をみせたのは、監督がヨーロッパで知り合った映画プロデューサー、白井隆。初体験とはいえ、落ちついた台詞まわしは役者顔負けの堂々たるものだった。

【絶対真理教団】

◇うっすらと胡散臭い笑みを浮かべる教団の総務を演じたのは[新宿梁山泊]で演出、脚本、出演の三役をこなしている、鄭義信。『月はどっちに出ている』(’93)で数々の脚本賞に輝いたことは記憶に新しい。また、十月末に完成予定の崔洋一監督次回作品『東京デラックス』の脚本も手掛けている。



◇操られているかのような決まりきった宣伝文句を並べたてる広報の女性を演じた中上ちかは、中田新一監督の『BE FREE』(’86)でスクリーンデビューを果たし、以後は様々な作品で脇を固めている演技派女優。また、渋谷の駅前に立ち〝絶頂ですか〟と勧誘に励む、熱心な信者に[新宿梁山泊]の舞台女優、村松恭子が、そして節子に阿久の電話を取り次ぐ受付嬢にはテレビ・ドラマを中心に活躍している加倉井えりが扮している。

◇絶対真理教団は、経験豊かな俳優たちの瞬発的演技力の見せ場となったようだ。

【山の手線の乗車客】

◇第三被害者小田原和子と同じ車両に乗り合わせ、とぼけた会話を交わすサラリーマン、鳥居と三好を務めたのは、「お笑いスター誕生」でデビューした〝象さんのポット〟の時生今日人と宮野一志。ライブなど精力的に活動してきた二人だが、昨年5月に劇団[何故象劇場]を旗揚げしたにもかかわらず、残念ながら今年の2月に突然解散。現在は二人とも青年実業家を夢見て、アルバイト中。また、警察署内での殺人現場再現のシーンで自分の乗車日を間違え、緊迫している場面を和ませた、ちょっと間抜けな男を生田萬が演じているのも見逃せない。

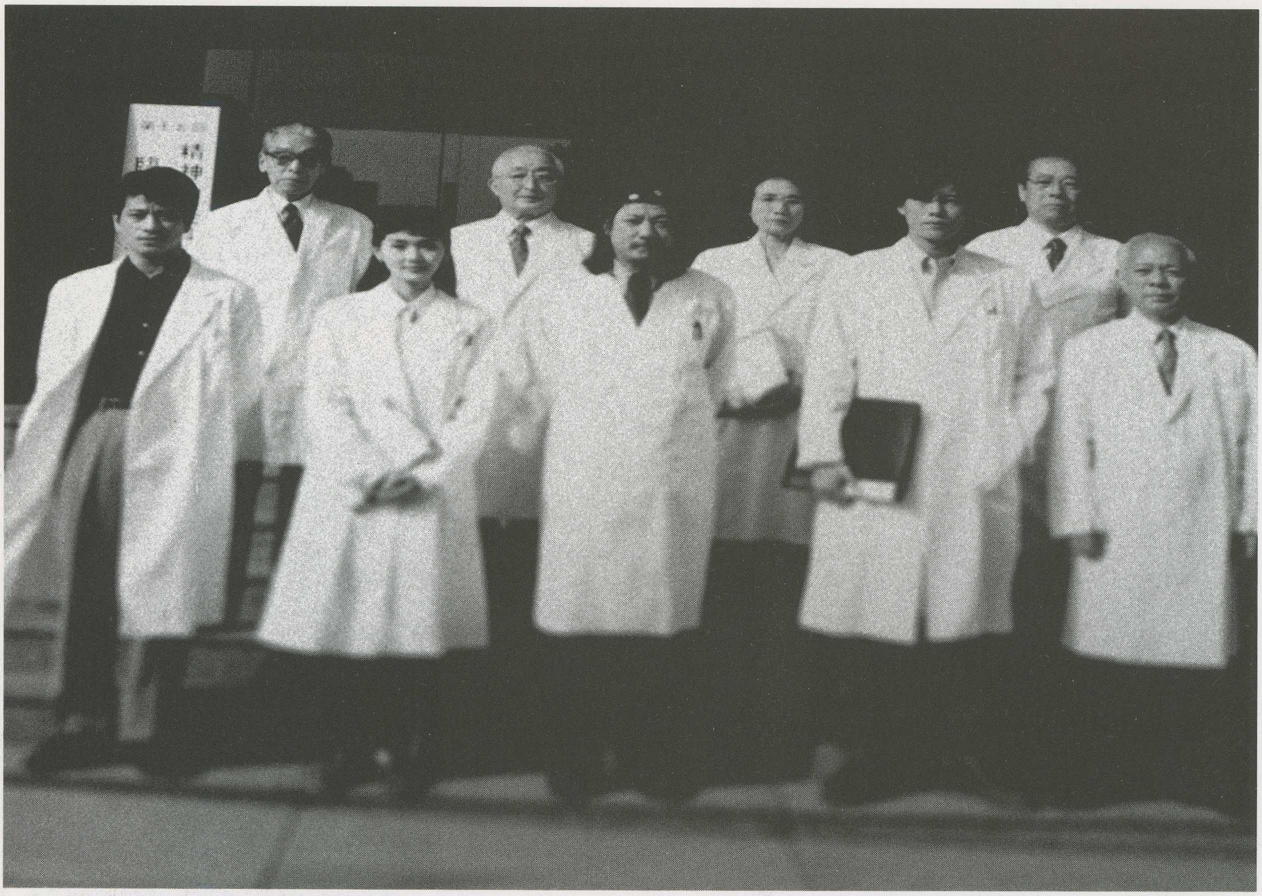


【阿久の助手、看護婦、インストラクター、美人レポーター】

◇石井監督の多彩な人脈はキャスティングの隅々にまでおおいにいかされている。リフリージング・サイコリュウムに勤めている謎の看護士は、ファッションショーやヘアーショーのイメージ・モデル・パフォマーとして活躍しているネヌファベゴニーで、今回は、トレードマークの派手な衣装も脱ぎ捨てて本名の山口陽子としてノーメイクで出演。

◇節子の運ばれた警察病院の看護婦役には、監督が通院していた〝気〟で治す歯科医の本物の看護婦、白鳥麗子。歯科医の国武先生も近藤等則の助手で顔を出している。

◇フィットネスジムのインストラクターには近藤等則が撮影現場に連れてきたボーカリスト、JUKKAが飛び込み出演。また、連続殺人事件を俗っぽく報道するテレビ・レポーター役、立原ちえみは監督の短篇『自転車』(’92)[J・MOVIE・WARS『TOKYO BLOOD』の一篇]で見覚えがあるはずだ。





石井聰亙監督プロフィール



Photographed by Keita Haginiwa

1957年福岡県生まれ。'76年に日大芸術学部映画学科に入学し、同年〈狂映舎〉を設立。8ミリで第1作『高校大パニック』を撮り、続いて『88万分の1の孤独』('77)、『突撃！ 博多愚連隊』('78)を監督。『高校大パニック』は都内の名画座でも上映され熱狂的な支持層を生むに至り、'78年に劇場用映画にもリメイクされる(澤田幸弘監督との共同演出というクレジットだが、石井監督は自作とはいえないとフィルモグラフィーから削除)。'80年には『狂い咲きサンダーロード』を16ミリで製作。東映セントラルフィルムが35ミリ版にブロウアップして劇場公開し、キネマ旬報のベストテン9位入選、邦画ニューウェーブの急先鋒となる。'82年には『爆裂都市 Burst City』を発表、この作品の現場は松岡錠司(当時、サード助監督)、太田達也(当時、フォース助監督)、阪本順治(当時、美術&編集)、キャメラマンの笠松則通ら、のちの邦画界を支える人材を輩出した。'84年の『逆噴射家族』はイタリアの第8回サルソ映画祭でグランプリを受賞し、石井聰亙の名は国内より海外でより高く評価された。その後、数々の企画がクランクイン直前までいきながら不運にも形にならず、長編映画からは遠ざかっていたが、その間もライブ・フィルムや短編作品で観客を刺激し続けていた。『エンジェル・ダスト』で完全復帰を果たし、早くも次回作『水の中の八月』がクランク・アップしている。

FILMOGRAPHY
フィルモグラフィー

76 高校大パニック

［狂映舎］
カラー／8ミリ／20分
製作＝大屋龍二
脚本＝石井聰亙
出演＝梅津正信／中村ジョウ／テアトルハカタ

数学できんでなにがわるいんや、の名セリフで知られる高校を舞台にしたクーデターもの。

77 88万分の1の孤独

［狂映舎］
カラー／8ミリ／45分

孤独な浪人生の鬱屈が狂気の暴力へ至るまでを描く。

78 突撃！ 博多愚連隊

［狂映舎］
カラー／8ミリ／75分
製作＝大屋龍二／石井聰亙
脚本＝石井聰亙
撮影＝伊藤敏朗
音楽＝シャイニー(中島康信)
出演＝志水正義／泉谷しげる／テアトルハカタ

喧嘩にあけくれる愚連隊のひとり、モデルガン狂いの少年がふとしたことから本物を手にしたことから巻きおこる大騒動。ヤクザと警察を敵にまわした決死の逃走を博多オールロケで生生しく描いた痛快アクション。

79 走る

カラー／16ミリ／12分
脚本＝平柳益実
撮影＝笠松則通
出演＝桑崎てるお

日大芸術学部時代の実習。

80 狂い咲きサンダーロード

［狂映舎＝ダイナマイトプロ］
カラー／16ミリ→35ミリにブロウアップ／ビスタ／95分
製作＝小林紘／秋田光彦
脚本＝石井聰亙／秋田光彦／平柳益実
撮影＝笠松則通
音楽＝泉谷しげる／パンタ&ハル／THE MODS
出演＝山田辰夫／中島陽典／劇団GAYA／小林稔侍／南条弘二

近未来シティ、サンダーロード。組織権力に反逆し狂気のマシーンと化すアウトローを主人公にした陶酔のバイオレンス・ムービー。

TAPE 東映ビデオ LD 東映ビデオ

81 シャッフル SHUFFLE

［ダイナマイトプロ］
B&W／パートカラー／16ミリ→35ミリにブロウアップ／ビスタ／38分
原作／大友克洋「RUN」
製作＝秋田光彦
脚本＝石井聰亙
撮影＝笠松則通
音楽＝ヒカシュー／バチラス・アーミー
出演＝中島陽典／森達也／室井滋／武田久美子／荒戸源次郎

刑事からの追跡を逃れるためモヒカン刈りにして、ひたすら走り続ける男。彼の脳裏に過去の記憶がフラッシュ・バックする。初恋の少女、ゴール寸前に転んだ陸上競技、そして殺した愛人。ほとんど台詞はなく、全編ロックが貫く。

アナーキー'80維新

［ダイナマイトプロ］
カラー／10分／16ミリ
撮影＝笠松則通
出演＝アナーキー

アナーキーのプロモーション・ビデオ。ライブ風景とイメージ・カットを編集したもの。

82 爆裂都市 Burst City

［ダイナマイトプロ］
カラー／35ミリ／ビスタ／117分
製作＝秋田光彦／小林紘
脚本＝石井聰亙／秋田光彦
撮影＝笠松則通
出演＝陣内孝則／大江慎也／町田町蔵／戸井十月／上田馬之助／大林真由美／泉谷しげる／コント赤信号／スターリン／麿赤児／室井滋

カスタム・カーによるデス・レースが繰り広げられているような頽廃した近未来の町。原発建設の強制労働を強いられた町の下層民たちの怒りはやがて暴動の火の手となる。

83 アジアの逆襲

［ディレクターズ・カンパニー］
カラー／16ミリ／30分
製作＝石井聰亙＋バチラス・アーミー・プロジェクト
脚本＝長崎俊一／利重剛／石井聰亙
撮影＝笠松則通
音楽＝バチラス・アーミー・プロジェクト(東京ダウザー)
出演＝有薗芳記／ヒロ／ヒデ丸／竹之内淳

同名のアルバムを元に製作されたビデオ・クリップ的作品。

核戦争後シェルターに生き残った4人の若者のイメージを音に重ねている。
'92年PFFのイベント、'93年の法政大学でのイベントなどでは新たに編集しなおしたバージョンをライブ演奏とともに公開した。

TAPE コロンビア

84 パラノイアック・ライブ

［日本コロンビア］
カラー／ビデオ／60分
撮影＝笠松則通
出演＝ルースターズ

ルースターズの'84年7月のライブ記録。同年10月21日に発売されている。残念ながら廃盤となり現在は入手不可能。

逆噴射家族

［ディレクターズ・カンパニー＝国際放映＝ATG］
カラー／35ミリ／ビスタ／107分
製作＝長谷川和彦／山根豊次／佐々木史朗
プロデューサー＝高橋伴明
原案＝小林よしのり
脚本＝石井聰亙／小林よしのり／神波史朗
撮影＝田村正毅
音楽＝1984
出演＝小林克也／倍賞美津子／植木等／工藤夕貴／有薗芳記

マイホーム主義のパパ、典型的な主婦のママ、アイドル狂いの娘、東大を目指すガリ勉の息子。郊外にマイホームをたてたばかりの幸せな4人家族。ところが祖父が居候し、家にシロアリが巣くっているとわかったあたりからパパの様子もおかしくなってきた。殺気だつ家族。家を舞台に映画は戦争映画の様相を呈する。海外ではThe Crazy Familyのタイトルで知られる。

TAPE 東宝ビデオ LD 東宝ビデオ

85 スターリン FOR NEVER 絶賛解散中

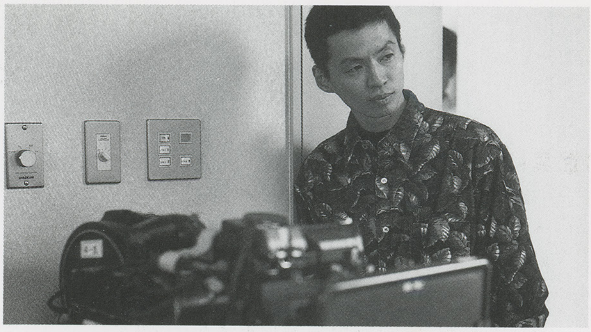
カラー／16ミリ／60分

スターリン解散コンサートのドキュメンタリー。

86 半分人間 アインシュテュルツェンデ・ノイバウンテン

［WAVE］
カラー／16ミリ／48分
製作＝東雅春／加藤英毅
脚本＝石井聰亙／中島吾郎／長嶌史明
撮影＝伊藤昭裕
出演＝アインシュテュルツェンデ・ノイバウンテン

西ドイツのノイズ・バンド、アインシュテュルツェンデ・ノイバウンテンのステージを鉄くずが散乱する工場の廃墟を舞台に構成した作品。暗黒舞踊の踊り手たちが舞う、ドラマ仕立てのシーンもある。



DUMB NUMB LIVE FRICTION

カラー／ビデオ／45分
撮影＝笠松則通／伊藤昭裕／石井勲

フリクションのライブ・ドキュメンタリー。

89 指圧王者 THE MASTER OF SHIATSU

［エンボディメント・フィルムズ］
カラー／35ミリ／スタンダード／13分
製作＝森恭一
脚本＝中沢新一
撮影＝篠田昇
音楽＝ダウザー（東京ダウザーの前身）
出演＝浪越徳次郎／アナ・ホール

指圧の心、母ごころ、の浪越徳次郎が全裸美女のツボを押すと、それがいつしか都市のツボと重なっていく不思議な一篇。

92 TOKYO BLOOD

［WOWOW/J・MOVIE・WARS］
「STREET NOISE」「自転車」「穴」「HEART OF STONE」
カラー／16ミリ→35ミリにブロウアップ／スタンダード／35分
製作＝仙頭武則（WOWOW）／佐藤正悦
脚本＝石井聰亙（「STREET NOISE」「HEART OF STONE」）
宇野イサム（「穴」「自転車」）
撮影＝笠松則通
音楽＝東京ダウザー
出演＝山田辰夫／小島正資（「STREET NOISE」）
立原ちえみ／大山澄子（「自転車」）
田口トモロヲ／酒井敏也／松尾スズキ／片桐はいり（「穴」）
宝生舞（「HEART OF STONE」）

'92年12月よりWOWOWチャンネル日本衛星放送でスタートしたJ・MOVIE・WARS（一人の監督が短編4本を監督する）の第1弾として製作された。

93 エンジェル・ダスト

94 水の中の八月

現在製作中

［注］作品の長さに関しては監督が何度か手を入れなおしている場合もあり、数分の違いでいくつかのバージョンがあるようだ。
ここでは調べた中で一番短いものを掲載。

スタッフ・プロフィール

脚本(共同)=生田 萬

1949年東京都生まれ。早稲田大学政経学部卒業後、'81年女優の銀粉蝶らとともに「ブリキの自発団」を結成。フィリップ・K・ディックの作品世界を触媒とし、「過去はいつも新しく、未来は不思議に懐かしい」という名文句とともに記憶される彼の一連の作品群は、'80年代の社会現象である小劇場ブームの先駆的な役割を果たし、片桐はいりなど異能の女優たちを輩出した。また、日比野克彦、伊藤桂司、近代芸術集団などの作家たちとのコラボレーションで、ブリキの自発団の活動の場を、演劇外のジャンルにまでひろげた。

鈴木忠志芸術総監督の水戸芸術館ACM劇場に演出家として、また串田和美芸術監督の東急Bunkamuraのシアター・コクーンに劇作家として参加。'93年5月には、シアター・コクーン恒例の春のレパートリー「夏の夜の夢」の演出を、また世田谷美術館の夏期の演劇ワークショップを'93年から担当。カルビー製菓のテレビCMにも出演中。'94年に入ってからは「30万円で出来るミニマル演劇」と題して、あらためて演劇を考え直す活動を行っている。セットもほとんどなく、照明も役者が舞台の中で担当するという小劇場ならではの企画を立てて、12月より下北沢のスズナリを中心に公演する予定。

著書：「夜の子供(戯曲集)」「やさしい犬」(面立書房)「かくも長き快楽」(沖積舎)「夜の子供2」(白水社)「クリンクラン(架空のオノマトペのためのABCブック)」(絵本／イラスト＝伊藤桂司／ミキハウス)など

撮影=笠松則通

1957年愛知県生まれ。日大芸術学部卒業後、フリー・キャメラマンとして劇映画の撮影を担当。今、最も注目を集める若手撮影監督。

映画：『狂い咲きサンダーロード』('80)『爆裂都市 Burst City』('82)『どついたるねん』('89)『バタアシ金魚』('89)『鉄拳』('90)『モンゴリアン B・B・Q』('90)『きらきらひかる』('92)『TOKYO BLOOD』('92)
Vシネマ：「夜のストレンジャー」('91)

音楽=長嶌寛幸(東京ダウザー)

1966年京都府生まれ。'86年に現バンド「東京ダウザー」の前身バンド「ダウザー」を結成。同年文芸座ル・ピリエ・フィルムライブコンサートで石井聰亙監督作品「アジアの逆襲」の音響リミックスを担当。その後、数々の劇映画音楽(作曲／演奏)を手がけている。

映画：『指圧王者 THE MASTER OF SHIATSU』('88)『ピノキオ√964』('90)『TOKYO BLOOD』('92)
CD：「Dowser」('89)「Route 946 Soundtracks」('91)
CD-ROM：Interactive Movie「Alex World」('93)

製作(共同)=下田淳行

1960年兵庫県生まれ。大学卒業後、フリーの製作部として高橋伴明、池田敏春、滝田洋二郎、石井隆監督作品等につく。1990年より㈱ツインズの製作に参加し、水谷俊之、磯村一路、福岡芳穂など若手監督を中心に深夜ドラマ、Vシネマ、映画をプロデュースする。

主な作品：『死霊の罠』('88)『病院へ行こう』('90)、『獅子王たちの夏』('91) 以上、現場製作部としての参加作品、『人間交差点―不良・道・雨』('92)『姐 極道を愛した女・桐子』('93)『仁義なきイレブン』('92)[Vシネマ]『ふざけんじゃネエ!』('93)[Vシネマ]など多数プロデュース

美術=丸尾知行

1953年福島県生まれ。神田美学校を卒業後、木村威夫、池谷仙英、山口修、小川富美男、戸田重昌などの助手をしながら、様々な作品を手掛ける。さらにATGや円谷プロ、にっかつ撮影所などで技術を磨き、現在に至る。映画だけでなく、2時間スペシャルのテレビ・ドラマやVシネマ、テレビ・コマーシャルなど多方面で活躍中。

主な作品：『死霊の罠』('88)『喪の仕事』('91)『ミスティ MISTY』('91)『人間交差点―不良・道・雨』('92)『ちぎれた愛の殺人』('93)『打鐘』('93)『姐 極道を愛した女・桐子』('93)

照明=水野研一

主な作品：『チー公物語―ネズミ小僧のつくりかた 世紀末版』('91)『きらきらひかる』('92)『シンガポール・スリング』('93)『殺し屋アミ』('93)[J・MOVIE・WARS 榎戸耕史篇]

録音=菊池信之

1945年栃木県生まれ。中央大学卒業後、'68年から'87年まで小川プロダクションに所属。その後、フリーとなって映画、テレビ、Vシネマ、ドキュメンタリーで活躍中

主な作品：『ニッポン国 古屋敷村』('82)『1000年刻みの日時計・牧野村物語』('86)『千利休』('89助手)『式部物語』('90助手)『阿賀に生きる』('92録音協力)『きこぱたとん』('93)『難波金融伝 ミナミの帝王』('93)

編集(共同)=松尾 浩

1967年長崎県生まれ。横浜放送映画専門学校の浦岡敬一(編集)ゼミを卒業後、㈱グループ・タックに入社。編集の古川雅士に師事する。'91年に退社後、石神井に松尾編集室を設立。

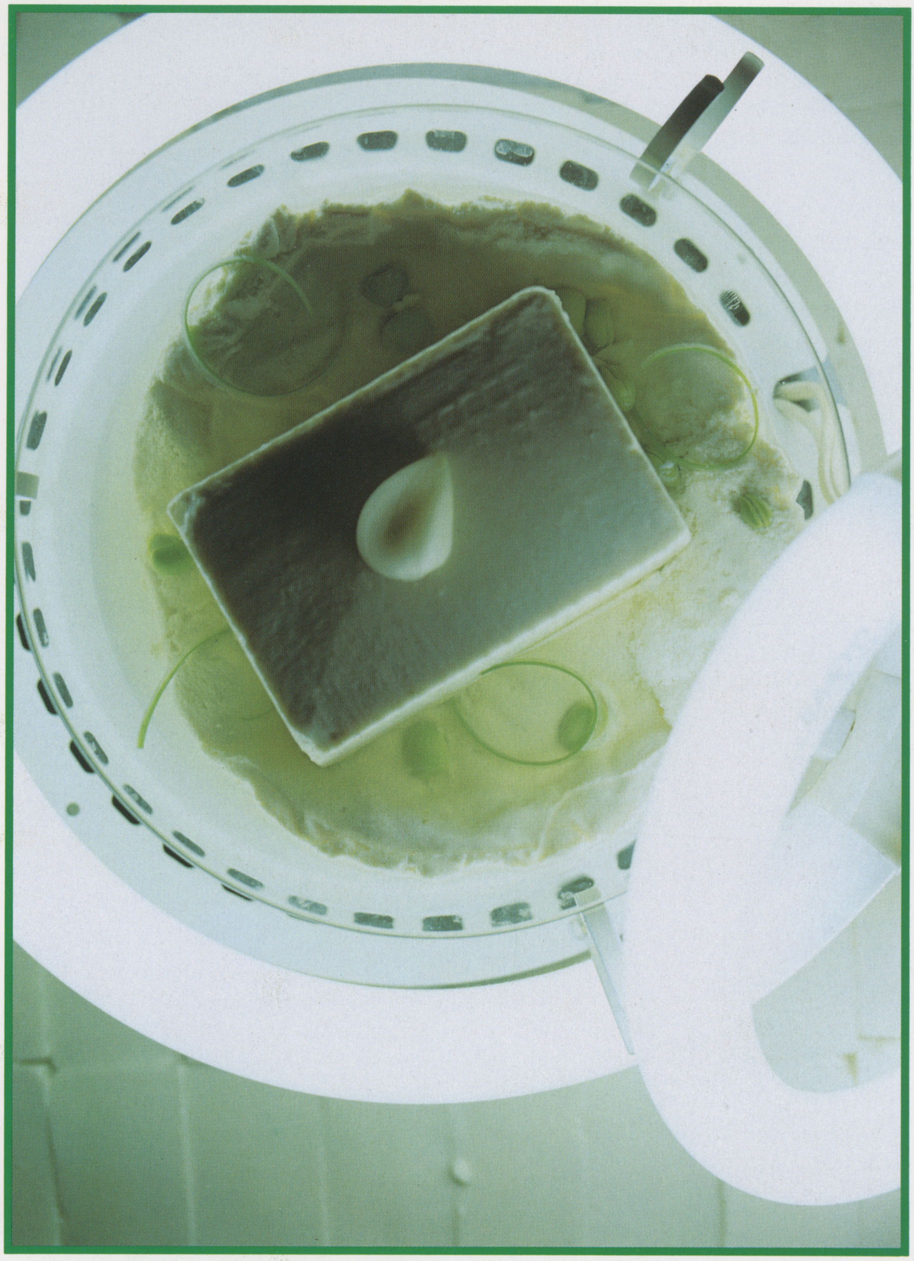
主な作品：『あさき夢みし』('85)『自転車』('93)([J・MOVIE・WARS]石井聰亙篇) 以上、助手としての参加作品、『トーキング・ヘッド』('92)『二十才の微熱』('92)

エンジェル・ダスト

映画を食卓に連れて帰ろう●20

カドにぶつかって死んでしまおう豆腐

●撮影＝小泉佳春
●料理＝CUEL（ハギワラトシコ・山田 亮）



FOOLISH WEAPON

映画のイメージから生まれた料理を紹介するページです。

◆バカと言われて腹が立つ？ 頭が悪いと言われたら？ またはセンスが鈍いだの感受性が鈍いだの「おまえ、鈍いんだよ」だのそんな評価の言葉を自分の胸に鋭く突き刺して傷ついてしまう？
◆冗談じゃないぜ。突き刺す針も、針のような言葉も、針のような研ぎ澄まされた感性ってやつもいらねえな。張りつめた空気ってやつもキワドイ愛ってやつもいらねえ。おらは豆腐の人生ってやつでいい。満足してんだ。よお、おらの弱みをつついてみろよ。
◆おいおい、かっこういい和食なんかじゃねえぞ。自然食品だけども病気を治してくれるわけじゃねえぞ。頼るんじゃねえぞ。ホント二頑張らねえと死んじゃっても殺しちゃっても知らねえぞ。ホント二器に美意識を盛りこむなよな！
では、ぐずぐず豆腐の作り方です。

【材料】（1ザル分）
大豆（一晩1200ccの水に浸しておく）300g
ニガリ大さじ1
ぬるま湯100cc

【作り方】
❶ニガリをぬるま湯で溶いておく。
❷大豆をつけ汁ごとミキサーにかける。またはすり鉢でする。何回かに分けてやるといい。
❸深ナベに汁ごと入れて火にかける。沸騰したらすぐ火をいったん止める。
❹再び火にかけ、焦げ付かないよう、吹きこぼれないよう弱火で8分煮る。
❺これを木綿の布で漉す。ものすごく熱いが最後は、手で絞って漉す。この絞りカスはおから。汁は豆乳。
❻豆乳を火にかけ70～75℃に熱したらすぐに火を止め、ニガリ液を2回に分けて入れ混ぜる。
❼フタをして15分蒸らす。
❽ザルに布をひき、豆腐液を入れて15分おく。水にさらしてでき上がり。

ストレンジ・プラトニック・ラヴ・ストーリー

●『エンジェル・ダスト』には性のある身体は出てこない。男、女、そして両性具有者が登場するのだが、彼らは性の熱さと湿度を抱えた肉体としては登場しない。男は徹底した理論実践者として男なのであり、女はある感情のゆらぎのあり方としての女であり、両性具有者はどちらの性を合わせもつものとしてよりむしろ「無性のもの」として存在している。そして男はその繊細な振る舞いにおいてジェンダーとしての女性に接近し、女はそのタフな行動力においてジェンダーとしての男性に接近している。

●男と女（そして両性具有者）はある愛を生きるのだが、それは体液の交換というような、粘膜的なものとしては選択されない。性の無い身体で、それは不可能なことである。

●それ、は心理の反応（もしくは感応）のゲームとして行われる。
いや、ゲーム（遊戯）ではそれはないだろう。それは論理の実践である。男はその意味でとても誠実な"恋人"だろう。誠実であればあるほど男は女を苦しめてゆく。女は追いつめられてゆくだろう。

●女は逃げ、別の人間を求める。その人間は男と女の身体をもち、男と女のどちらの身体をももたない人間である。彼女はやっと彼／彼女と「心理のメビウスの輪」ではない「身体の感応」を手に入れる。

●このカップルが「セックス」と呼ぶもの。
それはベッドの中の汗まみれのプロレスごっこではない。お互いの皮膚と皮膚から立ちあがる「何か」を交感させるやり方。それは静かで奇妙なダンスを思わせる。きっと性器を使用しないやり方。ストレンジなやり方。

●心理の過剰。肉体の欠如。

●それはそのまま都市にも当てはまるだろう。フィルムの最初、東京の街がロングにロングに写される。乱立するビルディング、内臓のようにのびる高速道路。流通する大量の商品。それは全く、物質である。モノである。しかし、それらをつくりだしたのは人間の欲望である。それらはモノであり、しかし私達の欲望である。遠くの人とお話できたらいいな。テレフォン。色んなものをたのしく安全に行ったことのない所の風景をみてみたいな。テレビジョン。いつも快適に暑くもなく寒くもなくいたいな。ルーム・エアコン。

●単なる物質なんて、都市には存在しない。

●そして「単なる情報」も都市にはありえない。




Illustration by Kyoko Okazaki

岡崎京子

［おかざき きょうこ／漫画家］

●単体の情報をそのまま受け入れる幸福は、私達にはすでにない。情報は単体として発信されるかもしれないが、受信したとたん、それは他の情報と組み合わされ接続され混同されキマイラ状の「かたまり」となるだろう。そしてある情報はある情報のプログラミングを破壊するだろう。またバグを発生させるだろう。ある情報がある情報に浸食して別の何かに変容する。ハッキングもウィルスもコンピューターで起こったことではない。すでに人間で起こったことを、コンピューターが（やっと）体験しているだけだ。またはコンピューターを通じて私達が（やっと）認識できたことだ。

●この『エンジェル・ダスト』では人間の死は脳というハード・ウェアの故障としてあつかわれている。個人の思考／記憶のプログラムが、ある一方的なプログラムをイン・プットすることで「こわれる」。
「こわれる」ことでその人間はすでに死んでいるのである。

●殺人事件が起こる。それは衝動的に怒りにつきうごかされた血みどろ、血まみれの肉塊転がる死ではない。それは冷静で沈着な計画の実践の結果としての殺人であり、その技法として肉体的な苦痛と恐怖を排除した洗練された方法が選択されている。多分、死者たちは自分が死んでゆくことも分からずに死んでいっただろう。
死には二つの死がある。肉体の死と精神の死。だとしたら死者達は、もうすでに自分が死んでいたことも知らず死んでいったのかもしれない。

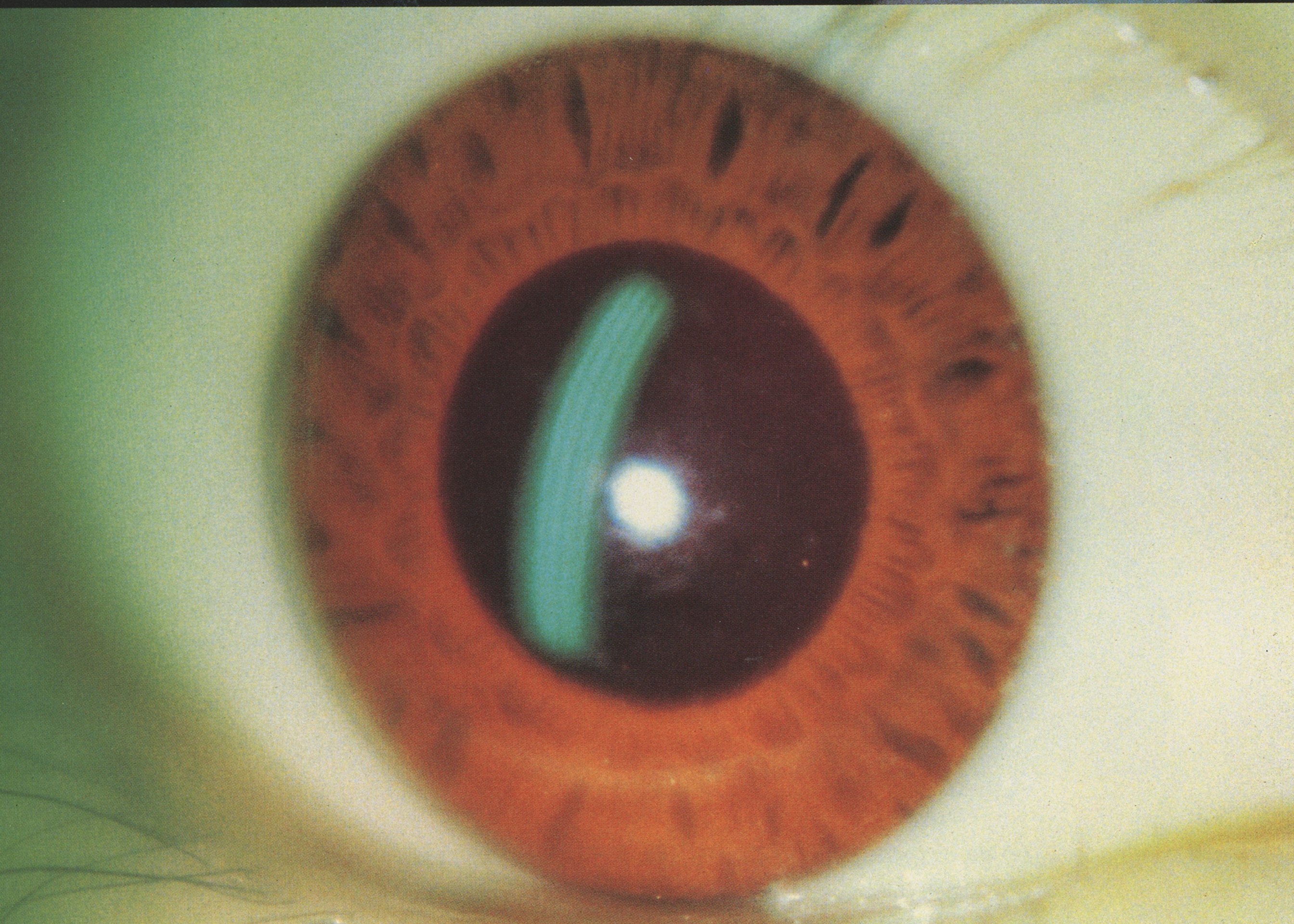
●この映画で肉体は徹底的に排除され、意識／無意識が徹底的に写し出される。
殺人事件が起こる。それは肉体の死によって事件としてあつわれる。では、（いわゆる）精神に対する殺人はどうあつかわれるのだろうか。

●肉体と精神を分離したものとみなすこと。そのことじたいがある「倒錯」である。しかし私達はその「倒錯」の中でしか生きられない。都市の中で私たちはすでにANGEL（性も肉体もないもの）でありすでにDUST（屑、ゴミ）である。

●最後、男と女はまた再び愛しあう。性もなく、肉体もない、心理の戦争としての“プラトニック・ラヴ”。都市という奇妙な場所でしか成立しない奇妙な恋愛。ハッピィ・エンドが最初から回避された、誰も勝者に成り得ない恋。

●つまり、『エンジェル・ダスト』は誠実な“東京ラブストーリー”である。現実の東京に対しての。現実の東京で起こるレンアイに関しての。

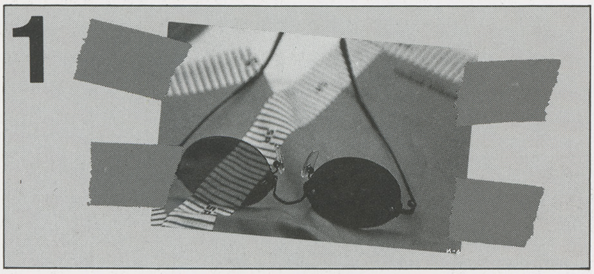






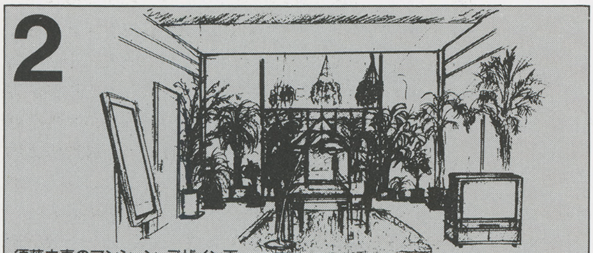


『エンジェル・ダスト』の10 pieces
プロダクション・ノート



1 piece──殺人要因は自殺願望フェロモン

◉東京を舞台に起こる連続殺人、精神分析、逆洗脳、マインドコントロール、ラヴ・ストーリーと様々な要素を取り入れた『エンジェル・ダスト』の脚本がまとまるまでには半年以上が費やされている。一番、頭を悩ませたのが利害関係の成り立たない状況で起こる殺人事件の要因を何にするか、という点。脚本の生田萬は動物が特定の色や匂い、音、形などに反応して行動する性質にヒントを得て、ある種のフェロモンを感知する犯人像を生み出した。被害者たちが発している〝殺して欲しい〟という信号を犯人はあるパターンの色の組み合わせに読みとるのだ。この色×色の謎は「眠れぬ森の美女」のピンクとブルーのドレスに暗示され、自殺願望を持つ被害者たちは、「殺して欲しいと旅人にせがむラクダ」に象徴されている。



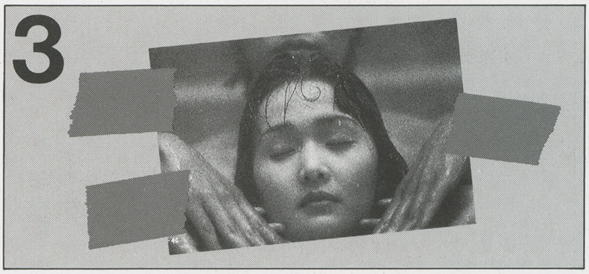
須藤夫妻のマンション、デザイン画

2 piece──植物園ではないけれど

◉異常な犯罪者たちの心の中を戦場としている節子。彼女が帰る場所は、トモオの待つ二人だけの安息の地。そこは、無機的な東京の風景とは対照的に、何種類もの植物が所狭しと並んでいる大きな温室のあるマンションだ。監督は、須磨夫婦を俗世間から逸脱した精神世界の住人のように仕立て上げるため、本当の植物園の中にセットを組むことを希望したが、それは無理な注文。頭を悩ませた美術の丸尾知行は室内のセットを組み、所狭しと植木を並べた。それでも鉢の置けるスペースには限界があり、監督の言う「圧倒的な数の植物に囲まれた空間」を作り上げるには試行錯誤が繰り返された。こうして生まれた温室は、鬱蒼とした得体の知れない異空間としてカメラに捉えられている。

3 piece──石井流〝男と女の濡れ場〟?

◉温室の中央にあるピラミッド型のミストサウナの中で節子とトモオが肌を寄せ合い、ヨガともダンスとも言い難い不思議な瞑想を行う。このシーンのもとになっているのは哲学者ルドルフ・シュタイナーが唱えた〝メディテーション〟。「黒い十字架の上の7つの薔薇」を心に描き、それが次々に花を咲かせるイメージに集中する。そうすることで俗から離れ、魂の内部を認識できるという考え方だ。これをアレンジし、振付したのは、創作ダンサーの本田留美子。「一種のセックスなんだけれども、いわゆる肉体的ないやらしいものではなく、精神的エクスタシーを感じているというようなダンスにしてくれ」というのが



監督からの依頼だった。彼女は、二人の内面世界については考え込まず、共同作業で薔薇を咲かせていくイメージを形にすることに留意して創作した。そのかいあって平凡なベッドシーンとはかけ離れた、監督らしい〝濡れ場〟が出来上がった。



4 piece──ベジタリアンのトモオは良妻の鏡

◉夜遅く、仕事を終えて帰ってくる節子のために愛情料理を作って待つトモオ。テーブルに並べられたのは、カブの煮物やカボチャをくり抜いて作ったスープなど。脚本を読んだ小道具の城丸泉が「こんな浮世離れした人間は絶対に野菜しか食べない」と独断でトモオをベジタリアンに設定。料理雑誌「シェフシリーズ」(中央公論社刊)の野菜料理特集号を参考にビタミンたっぷりの献立を組み立てた。

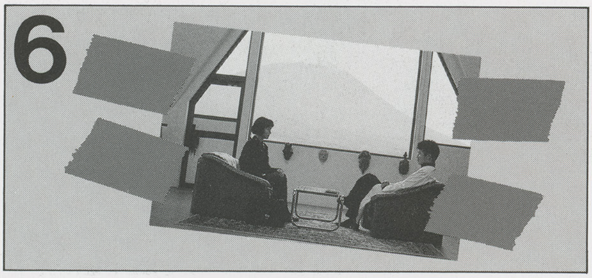
◉また、トモオの所作については、監督が歩く姿からドアを閉める手先の仕種まで細かく演出。豊川悦司もこれにこまやかに応えた結果、今ではめったにお目にかかれない、控えめな良き妻? となって出来上がった。



5 piece──撮影隊も震えたケービング・シーン

◉映画の冒頭、節子は、その後直面しなければならない強烈な精神的葛藤を予測したかのように、地底深く洞窟の中をさまよい歩く。幾重にも道が入り組む富士の風穴は、まるで大脳を旅しているかのよう。このケービング、日本ではあまり聞き慣れないが海外を中心に注目を集めている。もともと洞窟探検は、火山や石炭、洞窟生物等の研究、また地下水脈や作図の調査などの目的で行われていたもの。しかし最近では、迷ったら最後という日常では味わえないスリリングな体験を求めてスポーツとして楽しむ人も増えている。

◉今回の撮影コーディネーター、立原弘は日本洞窟協会理事、日本火山洞窟学協会副会長の肩書きを持つ洞窟探検のベテラン。彼によると、このスポーツは歩き慣れた経験者であっても、突然、行き先を見失って混乱し、脱出不可能となることもあるらしい。今回は撮影隊の仕事がスムーズにいくような場所が選ばれたとはいえ、経験のない者にとっては油断できない危険な路。この緊迫した状況が南果歩の恐怖心を煽り、日本映画史上初、戦慄のケービング・シーンとなった。

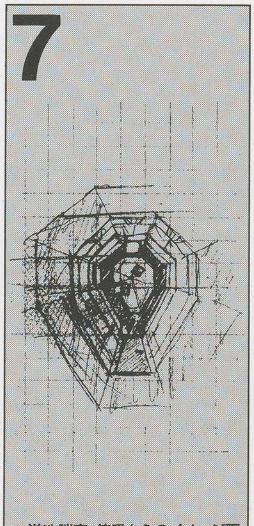


6 piece——富士山の見える大きな窓

◉富士山麓にあるリフリージング・サイコリュウムは、合成でもなくセットでもない。本当に大きな窓から優雅な富士が見物できる建物を借り切って撮影は行われた。念入りなロケ・ハンで見つけ出したその建物は、富士山を撮りつづけている写真家、大山行男さんのアトリエ。阿久の生活感を出さないために台所を本棚で隠す程度で、あとはほとんどそのまま使用。撮影当日は天候に恵まれ、美しい富士が姿を現した。それを背景にシーンを撮りおえたスタッフ一同は、快く貸してくださった大山さんに心から感謝した。

7 piece
——スクリーンには写らないところまで

◉逆洗脳室のシーンの撮影は全てスタジオ・セットで行われた。画面では分かりづらいが、よく見ると室内の壁が少しずつ傾斜している。これは、蜘蛛の巣をイメージして作られたものだ。真上から覗くと周囲の壁が5段階に傾斜して、阿久に逆洗脳を受けている人物が獲物となって囚われているかのように見える。俯瞰で捉えたシーンこそないが、「私はあなたに囚われているの」という節子の台詞があるように、阿久の世界に入り込んでしまったが最後、もがき苦しめば苦しむほど、どんどん吸い込まれていくことを暗示しているかのようだ。

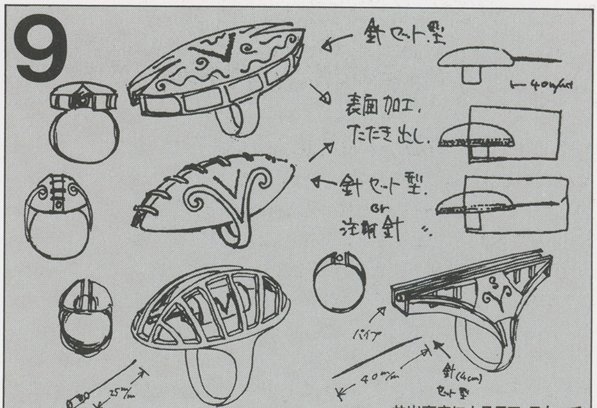


逆洗脳室、俯瞰からのイメージ画



8 piece——ミケランジェロふうブリューゲル

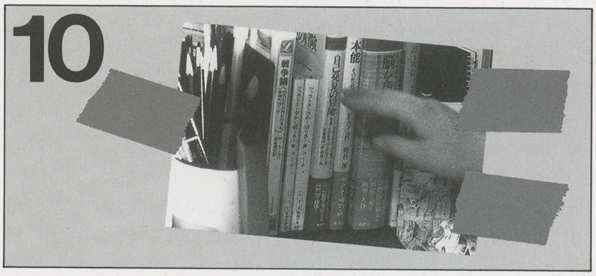
◉阿久の部屋に飾ってある一枚の絵は、ピーター・ブリューゲルの代表作「幼児虐待」(Le Massacre des Innocents/1565—1567年)。イラストレーターの城芽ハヤトは、日本では手に入りにくい画集を集め、村の風景や生活をいきいきと描いたブリューゲルの作風を忠実に模写した。しかし監督は、仕上がりに満足せず、もっと描き込んでほしいと言う。一度は「これがブリューゲルのタッチなんだ」と言い張ったものの、阿久の性格を匂わせるように、絵の虐待部分をカメラで撮りたいと監督から説明を受けた彼は、アップに堪えうる作品にするのが仕事、と納得して、中央部分のみ緻密に描き込んだ。こうして城芽ハヤト作のブリューゲルは、〝真ん中だけミケランジェロ〟という新しいタイプの作品となった。



井出高史によるラフ・スケッチ

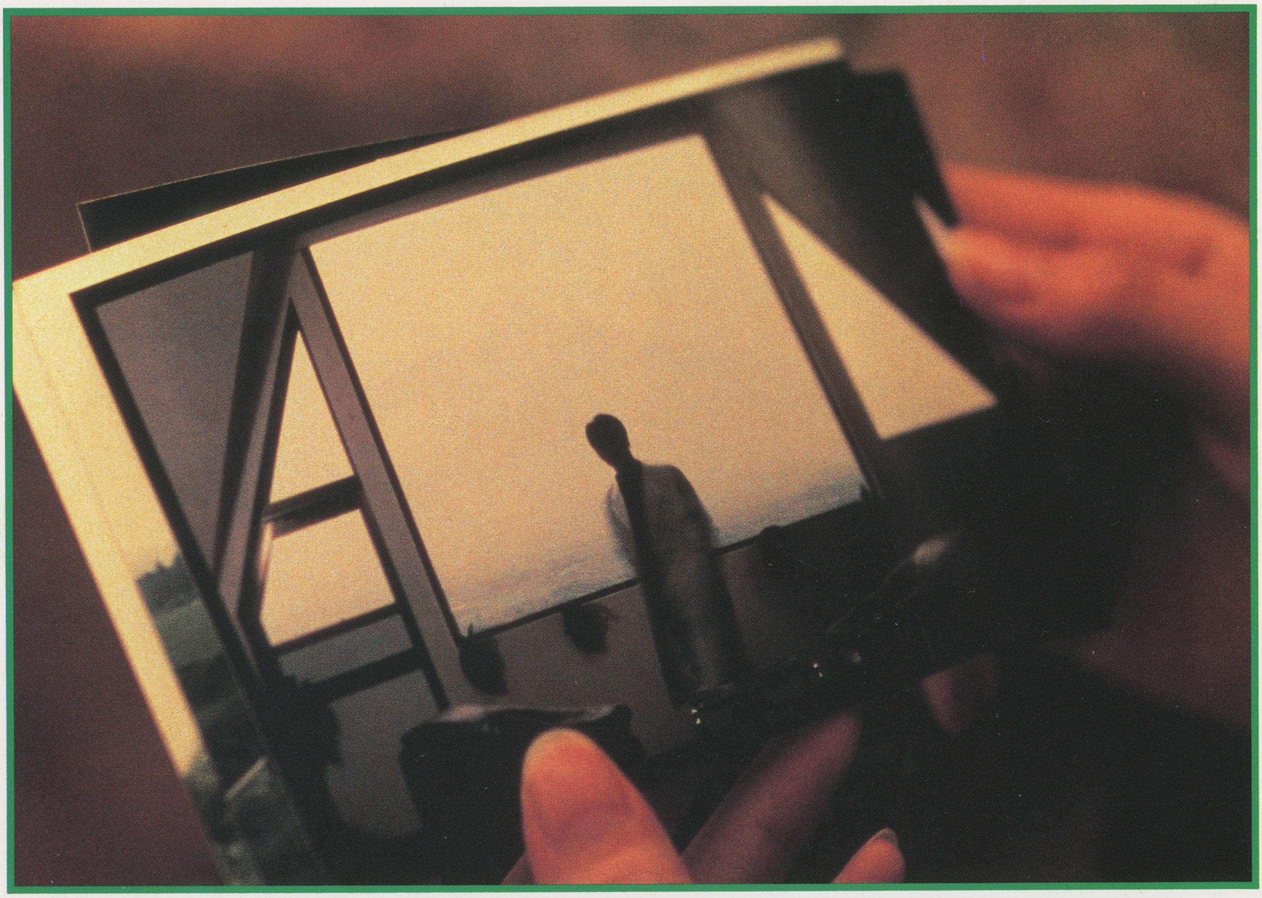
9 piece——隠されたキーワード〝V〟

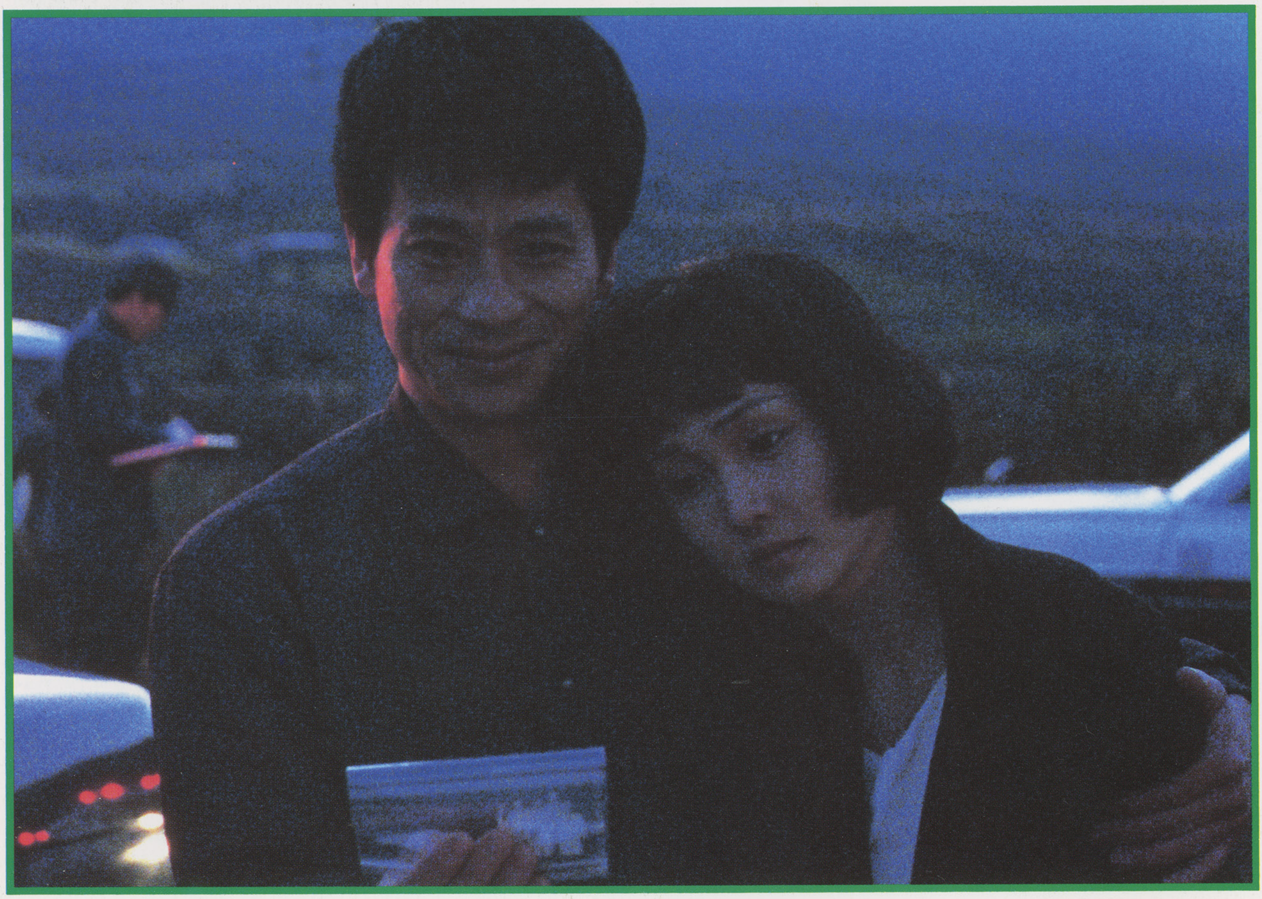
◉蜂の一刺しで次々に被害者たちを襲っていく殺人凶器は、ゆうきの指に鈍く光る銀色の指輪。そのシルバーリングには、阿久がゆうきをコントロールするための呪文として使われる〝V〟という文字が刻まれている。二人の間だけに存在するキーワードとして、他人に分からぬよう目立たなくし、しかも印象的な造形に仕上げてほしいと監督から出された注文にそって無心に制作したのは、アーティストの井出高史。撮影終了後、あらためて映画で自分の作品を見た彼は、この指輪は阿久がゆうきをコントロールするために与えたもの、もしくはゆうきがコントロールされたいがために自分で作ったものであると確信したという。サイドや針の飛び出す部分にまで〝V〟があしらわれたこの指輪は、映画の中でしっかりと〝凶器〟を演じていた。



10 piece——阿久のブックリスト

◉この映画を製作するに至った監督がどっぷりと漬かっていた精神世界は、リフリージング・サイコリュウムに通っていた第一被害者、朝日由美子の遺品から、阿久の愛読書として発見される。
◉『ツァラトゥストラはかく語りき』上下　ニーチェ著・竹山道雄訳　新潮文庫／『自己発見の冒険(1). ホロトロピック・セラピー』スタニスラフ・グロフ著・吉福伸逸、菅靖彦訳　春秋社／『脳を超えて』スタニスラフ・グロフ著・吉福伸逸、星川淳、菅靖彦訳　春秋社／『本能』ロジェ・カイヨワ著・野村二郎、中原好文訳　思索社／『戦争論』ロジェ・カイヨワ著・秋枝茂夫訳　法政大学出版局
◉監督が作りだした阿久の人物像は、これらの中に秘められているのかもしれない。





Behind the Subtitles

天野じゅねっと

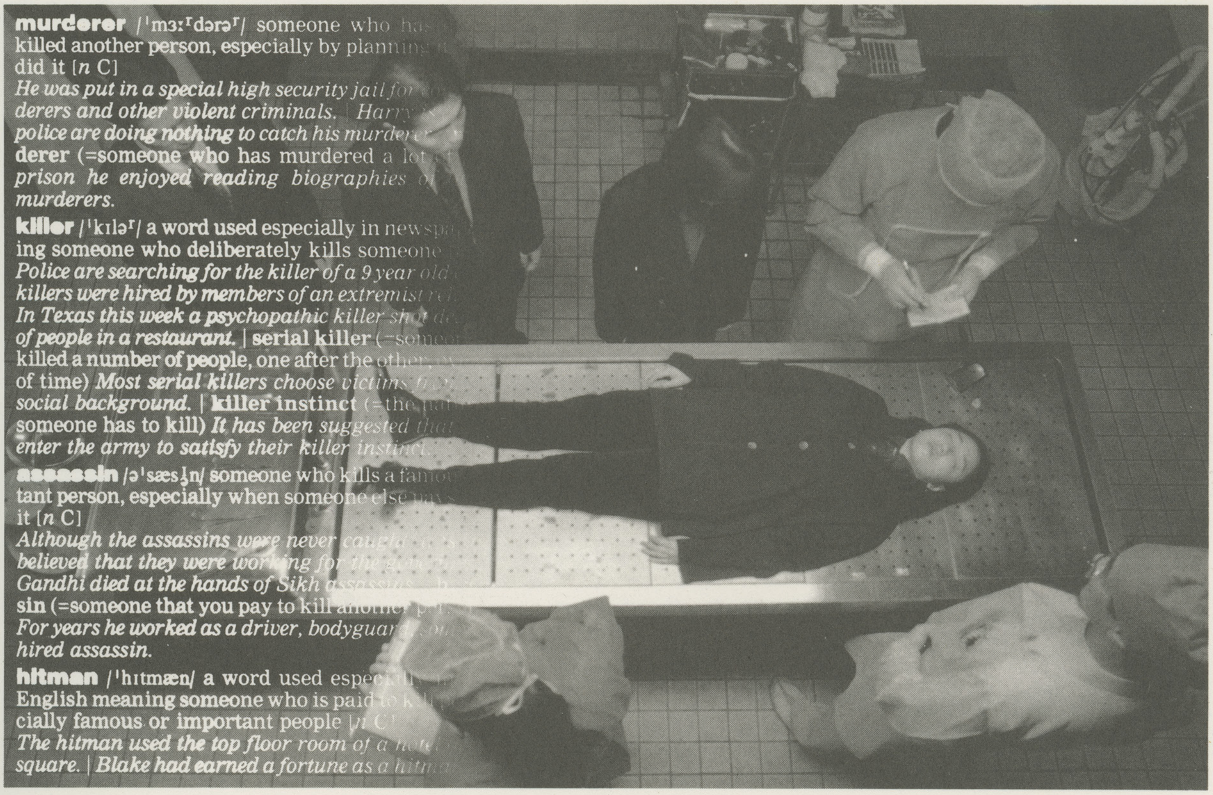
［あまの じゅねっと／英語字幕翻訳家］

♥映画の字幕というと、外国映画に日本語字幕を連想するのが普通だが、私の場合は逆で、日本映画に英語字幕を付けるのが専門。従って、日本では映画祭以外では殆ど観客の目にふれない。気楽と言えば気楽だが、ちょっと寂しい気もする。しかし、外国の映画祭などで、自分の字幕を付けた作品が賞を取ったり、評価が高かったりすると、無茶苦茶嬉しい。

♥日本語字幕の経験もあるので、どうしても比較してしまうが、日本語を英語に訳す時、一番困るのが主語の欠如や性別や単数複数が不明瞭であること。例えば「どこへ行った?」という簡単な台詞も英語なら「Where did you go?」、「Where is it?」、「Where have they gone?」などなど。「あれら」とか「彼女」とか限定されていればいいのだが、作品の画面を見ても定かではない場合もある。

♥『Angel Dust』は石井作品特有のムードを大切にするよう心がけたが、限られた字数の中で結構悪戦苦闘した。頻繁に登場する「山手線女性連続殺人事件」など、日本語字幕なら一行だけ、英語に直訳すると「Yamanote Line Serial Murders Claiming Women」となり、到底一行に収まらない。「特別捜査班」は「特捜班」と略語にできるが、英語だと「Special Task Force」とするしかない。それに、新聞の見出しや看板の文字として扱う時は、全部を大文字にするので、余計スペースをとる。

♥『Angel Dust』の訳で一番の難関は、意外にも警察無線などの警察用語。日頃映画やTVシリーズで聞き慣れているはずなのに……それらの箇所に来たら、「アレッ、どう言うんだったっけ」と情けない。簡単に思える「（殺人）犯人」でも、辞書を引けば分かるが、英語では色々な言い方がある。記憶を辿りながら、刑事たちには「perpetrator」と言わせ、一般人は「killer」にした。いやはや、思わぬ所に落とし穴があった。



エンジェル・ダスト
Angel Dust

◉定価――600円（税込）

◉発行日――1994年9月23日

◉発行所――ユーロスペース

〒150 東京都渋谷区桜丘町24－8－604

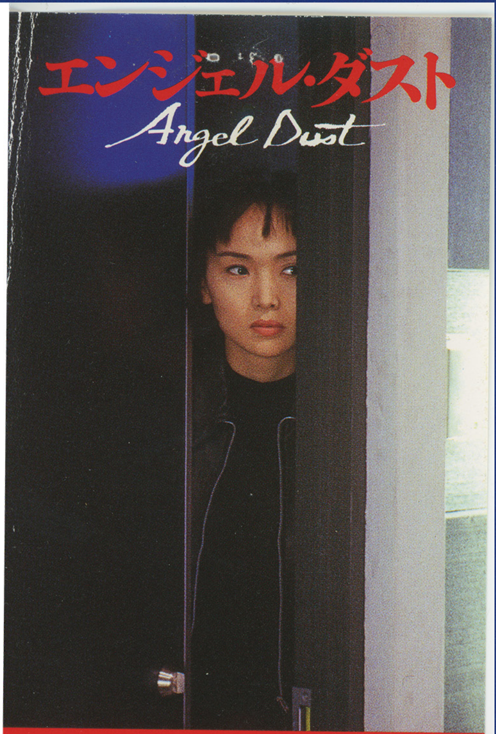
TEL. 03－3461－0212

◉発行人――堀越謙三

◉編集人――松田広子／遠藤万吏子

◉AD＋デザイン――辻 修平

◉印刷所――㈱文化印刷



伝説の石井ムーヴィーが還ってきた!

監督＝石井聰亙
脚本＝生田 萬＋石井聰亙
撮影＝笠松則通
音楽＝長嶌寛幸(東京ダウザー)
出演＝南 果歩／若松 武／豊川悦司
1994年 カラー 1時間56分

製作＝㈱ツインズ
製作協力＝㈱アミューズビデオ／ユーロスペース
配給＝ユーロスペース